

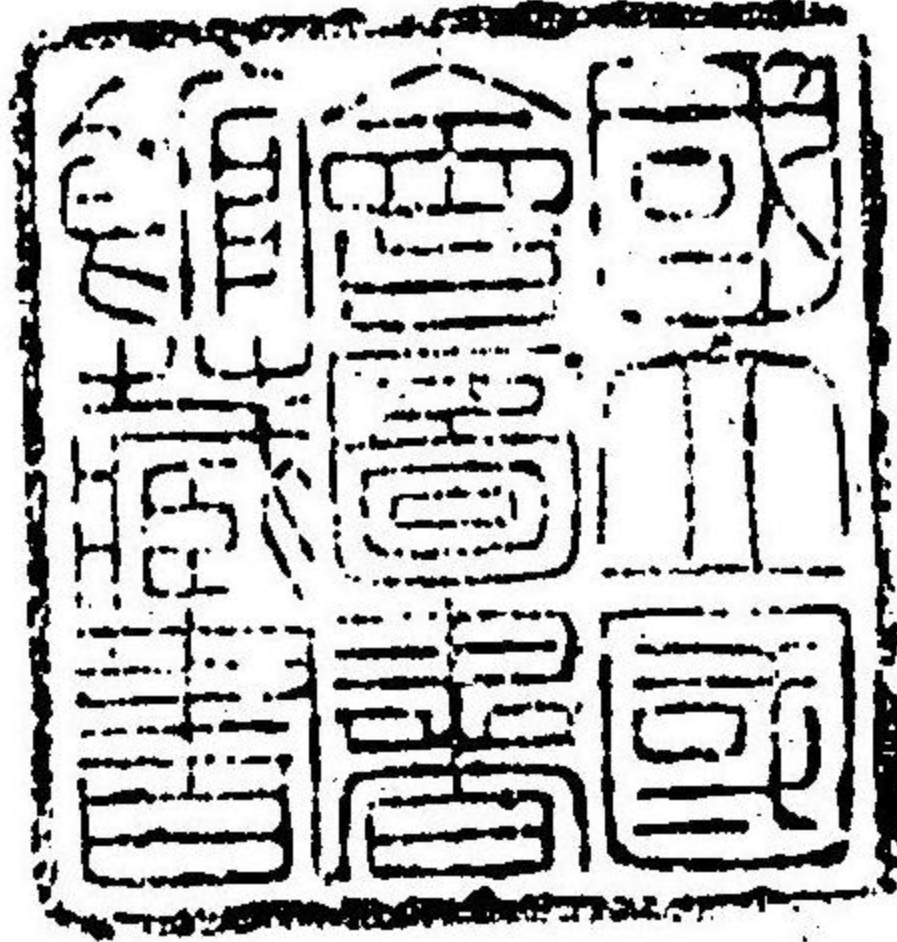


戲曲叢書

信州川中嶋合戰



912.4 T; 238



信州川中島合戦

近松門左衛門作

立子保三十八月三日初興行作者六十九歳

森々たる人品千丈の松の如く。裸々として節多く。柯々として目高しと雖も。大厦に施こ
 と時は棟梁の功用大いなる哉。勇將の人と見智將の人と知る。是と兼る名將新羅三郎十九
 代の後胤。甲斐の専城武田大膳太夫晴信入道信玄居士。御世子四郎御曹子勝頼君。家に紫
 蘭の芽と出せり。此度御父信玄の上洛。官位の願ひ成就武運長久の祈り。双の國信州諏訪
 明神に参籠有り。寄進の繪馬に珠玉と飾り寫し馬。舍人と引立て颯み嘶ふる狩野が丹靑。
 馬も祈願も懸け奉つる御神前。禰宜宮奴は祝詞と線て幣帛と大床に捧げ。巫女乙女は裙帯
 を引て透廓に舞奏つり。儀式も更に神々し。勝頼庭上に再拜し拜殿に上らんと仕給へば。
 執權高坂彈正御袖と扣へ。見申せば拜殿に褥と敷き座と推へ候。是々禰宜衆あれ此方の
 爲。但し外の設けなるのと問ければ。さん候越後の大守長尾景虎殿の御息女。衛門の姫
 君。あの松の木蔭に春駒書たる繪馬と上げ。追付御社参の用意只今神主方に御休息と。申
 ずに付て傳便に聞く衛門の姫。是幸に見せ欲しと思せども。高坂が女中同日の参り合せ。

信州川中島合戦

一



337116

時節悪しと思ふ氣色量り兼て在す所に。長尾の家臣直江大和之介時綱をる／＼と立出。御遠慮痛み入り候主人景虎願わりて上京に付。其祈として參詣信玄公にも御上洛とや。定めて同じ御祈り禱も新調御會釋に及ず。御着座有る様に仰せ上られい高坂殿。扱々御叮嚀の至り忝けなし。此方は遅からず先姫君様より。いや是非とも／＼其方より。いや何時迄もと辭儀も半途に衛門の姫。包む人目と洩れ出て。お辭儀の有るは男同士。殊に親御様と我身親水と魚とのお縁とや。女なれども其子なれば。身と浮魚の寄邊と頼む。誘ふ水は其方様いざ拜殿へも一所にと。手と取れば取替す越後縮の雪晒落は。京も及ばぬ手觸りに。勝頼鈍す打連れて一ツに絶る鉦の緒や。互ひに見ぬ戀聞戀の。今こそ諸願成就と神に誓願の呷さる。如何なる仇の鱗口も。云探されぬ中ならじ。時に廓門の神人遽たしく。當國の殿櫓村上左衛門義清公各々へ對面有るべき逆。只今是へと申上れば勝頼。應答も煩し兩人逢て挨拶有れ。我は何方へぞ外したしと。宣ふ間に村上が馬の嘶く聲。幸ひ此方の姫神主方に寄宿。苦のらずば此方へと思はず知らず案内する。大和之介に乘移り此仲人や諏訪の神。海より深き縁とのや。村上左衛門義清神前まで道具立させ。光爾ともせず。直江高坂

主達は一國の家老弓矢の法存せずとは云はせぬ。假令道中筋にても他の分國と通るには。先へ使者と以て案内する法。況んや當社の我分内。一應の届けもなく踏込む慮外至極。凡そ繪馬の神馬と表する物なるに。あれ見よ信玄乘馬の毛色甲斐の黒駒。馭人も留め兼ねる馬の勢ひ。必定村上が領分へ馬と入れ。信濃一國押領の威勢と顯はと爲な。殊に衛門姫の親景虎に某し所望仕のけ女房同然。然れば直江兄弟は家來分。主従の禮儀知らぬのと云ふより堪へぬ若者。何々と直江兄弟と家來とは。兄山城守實綱此大和之介時綱が事の。我々は越後の國守長尾景虎公ならで天が下に主君なし。御邊に一粒の扶持は得ず。家來とは推參千萬最一度云へ。延過た舌の根切り下んど。躍り出ると高坂彈正。暫し／＼大事の姫君御供我等も若豆那の供。理の非のど云ふ所でなし平に／＼と押鎮め。案内なく御領内へ立越せしどの御憤怒御尤も。去ながら使者と以て御案内申さば。道筋掃除等傳馬以下。御馳走仰せ付らるゝ御心遣いと遠慮に存じ。差扣へ不念となる心の外。眞平御宿怨下さるべしと。手と束ね慰懃の勝に乗り。扱句云ふまゝ勝頼と衛門の姫密通し。某しが領内と忍び逢の宿にせられ。鼻毛と算るゝ村上ならず。不義者の男女。落居する迄此義清が預り置

き動かせぬ。兩人共に置て歸れ。身が者共神主が屋敷と取巻き。大事の預り者油断なく警護く。繪馬踏み割れ叩き破れと憐れ所。お供の局下女腰元なふ情なや姫君様勝頼様。何時の間にかは行方知れず床にお文と残されしと。差出そ一通彈正追取り懐中すれば。直江も仰天村上藤々嵩に掛り。扱こそく神前にて不義の科顯はれし。當國の神の利生と見よ。主と失ひ武士は立まじ刺せばつて願人坊主。鉢ひらけと嘲けられ腹に据のね。切て出る大和之介と高坂押へて。武士の立ぬ事些ともない彈正に任されよと。野袴の裾高く挟んで身繕ひ。是れ村上姫勝頼兩人は義清が預り置と。一國の大名の番ひし詞失念の有るまじ。預り者なせ逃した何國へ落せし。サ聞かんサ云へと氣の付ぬ所の理屈詰。村上はつと當惑すれば大和之介も力と得。本人の行衛隠とは相見にて落せしな。科の元は預り主御兩所の行衛知る、迄の人質。我國へ連歸るサ来い歩めとねだり度程ねだられ。無念くも十面斗り一言の返答なく。大事の科人直江殿いざ繩と掛まいか。オ、尤と手ぐすね引たる英雄の頼魂ひ。マ、鬱憤道理く所詮宿したる神主めが不届。腹愈には神主始め禰宜めら獲らず。切てなりとも擲めてなりとも。夫に足すば明神の社壇打毀ちなりとも。此義清掃のぬく

と云ひ捨歸るも足早なり。高坂直江遙るに見やり打領さ。一通と拜見すれば。兼々商人の便りに文と通はし契約の中。義清に糾され耻と見んも口惜く。暫く影と隠すとの書置。兩人はつと惘れしが。なふ直江殿。申しても兩國守の姫君若君。御一門は廣し家來は多し。士民百姓と頼み給ひても。御身と寄せらるゝは自由。御行先に氣遣なし。兎角余所の領分にて騒ぎ狼狽尋ねては。面々主君の耻辱と觸廻るに同じ。首尾能く先當所と引取り。万事國堺と越しての談合。召具せられし下女僕婢。お供の旅体亂れぬ様に御沙汰肝要。此方の供廻り作法正しく早行列と下知となし。悠々として立歸る高坂彈正鎗彈正と。名に負ふ武士の一分別名將の家風芳ばしき。柵檀の林崑崙の石。玉の光りの世々永き武田の家と類ひなき。爰も昔の都ぞと名にし近江の湖水や。言の葉に乗り船に乗り渡る北國七里半。廻船の間丸屋表には歐荷山の如く。濱には數百の船艦ひ。桐の藪の印立てさせ崩の荒夫走せ違ひ。如意が嶽は早お越お先鋒は夫れ其所へ。御荷物積でなせ船に寝まらないと。北國訛の版行頼越後の國守長尾殿。滋賀の山越此津より。御歸國とこそ知られけれ。大津八町の方より武田信玄の足輕。五十八組の小頭横田兵介。問屋の門に大息つき。船支配する家は是

れな。亭主に逢ふと呼出し。音にも聞くらん甲斐の國の主。今日歸國米原迄船に召れよとの仰せ。新羅明神へ御参詣の爲三井寺に御休息。追付是れへ大船二十艘小船六十艘。屹と用意申し渡いた急げと呼ばれば。亭主驚る。越後の殿様長尾殿より先達て仰せ付られ。御覽の如く浦々の船迄驅集め。外に網船釣船ならで一艘も候はず。御太儀ながら瀬田へ廻り。今日の船の御用御免と頭と地に付れば。身が殿は新羅三郎義光公の末孫。清和源氏の嫡々首尾能く参内院参。忝けなくも大僧正に任官。足利の將軍も御尊敬の筋目。越後の長尾も上洛は召れしが。漸々將軍義輝公の輝の字と貫ひ。景虎と改め輝虎と名乗れば迎ひこがましい。先祖は鎌倉の權五郎景政。代々源氏の被官筋其輝虎に船と貸し。此港に一艘もないと申されよ。船印追奪つて此方の印に立替ると哄く中。輝虎の足輕進藤小平問屋の中より動き出。聞き度ない武田信玄が大僧正。腰拔の坊主官脚脛の体で。身が殿と信玄が被官船印追奪れとは。首がなくても奪られれば奪つて見よと。抜より早く切掛たり。ひらりと外し扱合せ口も口腕も腕。駈抜け切掛け受つ外しつ。命と露座土砂踏み立て一寸去す挑み合。兩家の先手一時に來掛り。とつと落合ひ漸々左右に引分け聲々に。甲州の御

家來横田兵介。越後の御家來進藤小平喧嘩。それ御馬留ませい扣へませいと呼れば。急ぬ信玄血氣の輝虎一散に馬乘進め。兩方鎧踏み放し馬上に式禮下々迄列と揃へて踞へり。相手ども是へ呼出せ。畏まつたど兩人と連出れば。兩將馬より下立ち輝虎大聲上げ。供先の喧嘩は普く諸家に禁むる所。意趣討か時の口論の品に寄て主人と主人の確執となる儀あり。次第真直に申分よと有りければ。進藤小平慎んで事の起りは船諍ひ。長尾の家は權五郎景政の末孫。源氏の被官との悪言堪忍罷り成り難く。斯の仕合と申す内より横田兵介。信玄が大僧正は腰拔の坊主官と申し。雑口聞かせし無念御免と蒙り。身命果し申し度と二人が詞有の儘にぞ訴へける。輝虎呵々と打笑ひ。御聞なされ信玄被官筋が響れと取り。主筋が憶れと取る事も有るべし。武遊は氏系圖に依ず。輝虎聊の耻辱とは存せぬが。して何と思し召と。仰せの如く腰拔の坊主官のゐるか。座頭の官でも弓矢の疵には少しも成らず。信玄努々心に掛らず。去ながら足輕体には奇特く。扱群の健氣者。彼等が遺恨も晴る爲。進藤小平とやらん申し請け。愚息勝頼が手廻りに遣いせせし。信玄に給はるまじや。然らば横田兵介とやらん。馬廻りに召遣ひ鎗一本の用に立たし。輝虎に下さるまいの。何が

叔進せいで。過分〜此方も進上申す。今日より進藤小平武田の御家來。横田兵介長尾殿の御家人ぞ。はつと左右に入れ替り。直に見得の禮有り和も有て。なふ武田殿船數もなき此濱さぞ御難儀。船中狭くとも暫しの海上。いざ御同船申そまゝの。仰せなくとも所望の存念祝者と。船の速恨の波風立す比良の暮雪と打解けて。見やる堅田の落雁と共に下居る床几の上。威將の會とも云ひつべし。時に信濃國村上殿より御使者と。輝虎の妻番披露して。使者は年頃天窓つき粕尾玄蕃と名乗り。三荷三種の樽肴白銀巻物。輝虎の御前に並ぶれば。是へ〜御口上承はらんとぞ仰せける。玄蕃愼んで。此度將軍家より輝の一字と御拜領。年來御勳功の印お家の眉目是に過ず。従つて御息女衛門の姫君。主人義清度々所望致せども御許容なし。年長る迄縁付運さ娘は必ず不義の浮名立ち。後に迎へ取る人なく。一期嬪となるのみならず親一門の名と下す例。若左様の事候ては長尾のお家の疵。早く義清が妻と定め給へば。世間の人口と塞ぎ。且は輝虎公のお爲。御入國と待す道中まで使者と以て頼みの御祝儀。目錄の如く進上目出度く御受納。冀かひ奉つると口上も終らぬに。氣早き輝虎はつたと睨み。北陸道に弓矢と取ては。五畿七道に隠れなき

長尾輝虎と知らぬか。娘と所望すれども否應の返事せず。契約も定めぬに尾籠至極な。押付て頼むとは信州の片隅に輝虎が庇にも足ぬ小城持たると。傲つて我と侮るの。縁付運さ娘の不義の浮名立ち。親一門の耻辱になるとは人も頼まぬ爲思ひ。我娘に不義あれば相手と糺し。同罪に行ふ越後の國風。耻と雪ぐに義清は雇はぬ。道中なれば生て歸す進物持て疾く歸れ。誰の有る使者め引摺戻せと。嘴付く様なる大音聲。荒肝取られて胴震へとも沈らぬ顔。流石大國の大將とも覺へぬ無骨に候。信州に武士多けれども。村上が譜代の家老粕尾玄蕃。此音物お氣に入らずば。其方より使者と以て返辨あれ。此玄蕃悄悄持つて歸らぬと。立んとすれば。憎い親仁めそれ彼奴に負せて歸せ。承はると若手の近習大小扱取り翼締め。樽肴進物ども一ツに荷造り。背中に負せ括げ着〜。本國へ戻り馬駄賃は主の義清のら請取れと。手足と取て追出せば。エ、無法な主人持た故思ひぬ面目失ふたと。主のしがあらさきに立つ。家老の身にて異見せぬ。我非は見へぬ鏡山頼押拭ひ逃失けり。兩家の上下とつと笑へば輝虎も笑壺に入り。何と武田殿。甲斐越後兩國に挟まれたる信濃の村上。貴殿我等の家風聞さ習ひも致さぬ。叔不作法千萬さぞ家の自憎落推量致せしと。詞

の下より越後に殘されし。甘糟近江が方より時付の早飛脚。息と切て輝虎の御前に馳着る。去る廿二日衛門の姫君。信州諏訪明神へ御參詣。武田勝頼と密通の懸幕にて連て國遠なる。直江大和之介御供より直に尋ねに出。未だ御在所相知れずと飛札と捧ぐる所に。甲州の留守居板垣兵衛が方より。飛脚の早打信玄の御前に大息次ぎ。去る廿二日若君勝頼公。信州諏訪明神へ御參詣。越後の姫君と兼ての懸路。御兩所連て行方なく。御供の高坂彈正尋ねに罷り出る趣き。委しく是にと差上る兩家の飛札飛脚の口狀。割符と合せし如く兩將息と詰給へば。諸武士も御機嫌計り兼鎮はつてぞ見へにける。剛氣の輝虎齒と咬しはり。縁付晚き娘は必ず不義の惡名立つと。申し越たる村上此次第知つたの知らぬ。彼奴が詞にひつしと當て此方閉口。長尾の家の侍大將にも足ぬ程の村上般に。非太刀と討れし輝虎が一期の無念と。面色變じて火の如く。此耻辱何と雪がんと。睨み遣たる信濃路や。頭の上るいけふりは淺間の嶽のと疑ひる。信玄動せず。悴勝頼其方の姫の云ふに足ぬ若き者女性。譽れも耻辱も親と親の間に有り。村上は喧嘩の行司構ひぬ事。所詮御分と信玄敵對し人數と調練し。信濃國と戦の場と定め。雌雄と決し信州の云ふに及ばず。越後の國とも切

取の甲州と取るゝの。其時耻と雪がんに何程の事。勝負の貴殿と信玄が軍慮の淺深に有るべしと。事もなげに宣へば。兼て武田殿に對し輝虎が弓矢も試みたく望む所。只今より刃と争ふ敵と敵。新參の横田兵介是へ來れ。はつと云ふより信玄も。進藤小平是へ出よ。己の元輝虎の家來敵方の首取初め。汝の元信玄が家人。軍神の血祭り。兩方兩人一度に抜討兩將突立ち。入魂の是まで重ねて戰場對陣の外。音信不通の証の盃獻た。獻ぞと。提たる首とのつばと投合ひ。勇んで別るゝ武士の。矢橋の浪の音替て関の聲とぞ。音に聞く名も山深き信濃路や。岩間は苔に埋れて。雲こそ雲と誘ひ行く。峰に伐木蕩々として。谷の水音潺々たり。爰に三州牛窪の浪人山本勘介晴幸と云ふ者有り。幼少にて父に離れ母の撫育に人となり。學ばずして石公孫吳の兵衛に通達し。其名央々と隠れなく。近國他國の大名より招けども。頼むべき主君と選み諸葛臥龍が跡と追ひ。今此國に影隠す片山人となら柴の。腰に草鎌山拐。暫し世渡る賤の男の木曾の麻衣袖袂さ。草の細道傳ひ行く。爰ぞ桔梗が原どのや。勘介眉に皺と寄せ。當國信濃は山深く常に雲は騒げども。やあら心得ぬ今日の雲氣。南は甲斐に續きて汐尻峠。北は越後に隣つて鳥井が嶽。兩方の頂上

より二筋出る白雲の。中に當つて亂れ散さながら軍の場の如し。察する所甲斐越後兩家の確執疑ひなし。信玄は良將輝虎は勇將。あら面白の雲の戦ひ。何方が勝とも負るとも。主持ぬ身の氣散じと。詠むる空も秋の日の短き煙管取出し。打石の火に立つ煙り淺間とらうに比べつ。煙草に余念無のりけり。武田四郎勝頼衛門の姫との浮戀路。義清に云ひ探され諏訪明神より立退き。爰に迷ひ彼所に隠れ。足も破れて血に染る茨萱の根小笹原。野路吹く風も追手のと。心の先に眼の跡に見歸り。衛門の姫。勘介にはたと行當り。御免なりませと愕り驚く斗りなり。勘介じろく尻目に掛け。若い女子若い男水入らずの二人連。ムムム聞へた親の極る縁のいや。貴様ならでと領さ合ひ。御の大事の誂へ饅頭はつり割の思案の外。野でも山でも此道。此方もちやつと柴藪で饅頭は喰すとも。喉が豆茶と賞翫致と打過る。勝頼袖と引留め。推量に違はず我々は親の許さぬ妹背の中。人目と忍ぶ者なれども。互ひに女なし夫なし聊の不義には有らぬとも。脇から邪魔の横戀慕。此姫と奪ひ取らんと敵ゆへに漂泊せり。近頃割なき事ながら夫婦と隠匿得させよかし。武運開のば武士となし。今の恩と報せんと生れ付たる大名風。勘介莞爾と打笑ひ。我迎も

胎内から柴藪では無れども。斯荷ひ瘤出來せし一人の母に孝の爲。すい奉公望む程ならば。恐らく百貫二百貫の所領は胸に覺へ有り。然ながら主取すれば討死し命と捨。祿の恩と報するが是れ忠の道。母孝行とて身とるはば祿盗人の不忠者。孝と立れば忠に欠け忠と盡せば不孝となる。此理に逼つて刀と止め。身の山猿と成りたれども。母の寢覺の能さ容顔。百万貫にも替るべきか。頼むと有るに身と引も孝行故。頼み少なき浮世とて心短く持給ふな。此所は其昔日本武尊東夷征伐の御時。一葉と結んで占考とし吉凶と試み。聖運開き給ひしより。吉凶の聲と象り結構が原と申すなり。爰まで落延給ふ事行末目出度き瑞相。此菅原と左へ行けば越後街道。此道案内が我等の寸志。ア、千變万化の浮世やと拐擔けて別れ行く。忠孝仁義の武士も下和が珠の埋れ居て。光りなきこそ是非なけれ。ア、天晴侍るな。大將たる身の七珍万寶にも替まぐ欲きは仁義の武士。家名と問ざる残念さよ。いざ先教へし道筋へと。萱踏み分けて入り給ふが急度思案し。なふ衛門の前。武藏坊辨慶が雪中の葉香逆まに穿たる例。今此草分る跡に心と付け敵慕ふは必定。此茂りに伏て敵と欺り落延んど。蓬葎と押分れば秋の許あらずはれて。幾年經し猪ののつたりと臥たる形ち。ア、

怖やと衛門の姫継り給へば、大事ないく。凄まじい猛獸なれを常の人に害せず。疵と受ては手負獅子の千人力。然もなき中は彼方の人と怖がる証據。狩人と恐れ踞み臥すと覺へたり。我も暫く隠家と双び臥猪の萩の床。草引覆ひ忍ばるゝ憂目を戀の慣なる。村上が郎等落合藤太鉄砲引さげ駆來り。あの尾上より見たり只た今。何方へ往たどてんでに探せ足輕共。是やこそ爰に足跡あり。高名せんと追懸る藤太押へて。急な者共此萱原が物真の試みに鉄砲呉んど。筒先下り打込み突込みニツ三ツ玉とうくく。重ねて響く手對槍のに勝頼して遣た。いで首取んと立寄る草葉ざりく。小山の如く背と持上げによつて出たる手負猪。八幡免せ人違ひ御免くと逃迷ふ。勝頼も姫と圍ひ打物扱て指向へば。荒に暴たる獅子奮迅。眼と怒らし牙と刮敵も味方も差別なく。巖石鉄壁斷割りく。退立れば、岸踏外してろくく。此所の岩陰彼處の谷。右往左往に逃散しは。危うのりける次第なり。早や夕陽の山の端の下枝眞柴薙り集め。人の十荷と勘介が一荷にて立歸る元の道。草踏散し地と發き山と隔つる人聲の。御簞に響く斗りなり。又は以前の若者敵に出合ひ戦ふふ。あゝら心元なやと案じ煩ひ立たる所に。尾先と廻る猪の思ひ掛なき後より。左手

の太股くわらりと掛け。一振振たる猪首の力一丈斗り跳上げたり。勘介瘻す足踏直し。憎い畜生皮引剥で蒲團にせん。返せ戻せの聲に猛つて一文字。二の身と蹴し遣過し。戻せば開き四五遍惱ましひらりと乗り。左手に尾筒右手に鎌。掻切る肋猪の血と人の血に。猪の毛髮じて狸々緋乗せは付じと。古木に摺付け岩に當ればとらと落。上になり下になり半時斗りぞ揉合けり。勘介數の所の疵の上右の眼と突潰され。流るゝ血に目も眩みた。よふ所と牙に掛け。そことも知らぬ谷底へ落ると見へしが松が枝に。掛る手先も孝の徳。ひらりと取付く早業は木傳ふ猿とも云つべし。猪の見上て怒となし木の根と穿つ鼻嵐。吹立てく石も砂も一捲り。土と返す勢力は犁鋤遣ふ如くなり。若木の松が根次第に堀てゆさくく。大地へとらと付より早く追取伸。物身の力腕に入れ擲り立たる滅多打。打れてたちく弱る平首むんづと締。難なく猪と組留めたり。勝頼をいやと見るより早く駆寄て。猪の急所と三刀四刀刺貫ぬき。兩手と取て引立れば。根氣勞れて正体なし。道理く。以前の情今又猪の害と避け。重々深き恩の人。我こそ武田信玄が一子四郎勝頼。妾は長尾輝虎が娘衛門の前。村上に妨げられ割なき戀路に苦むぞや。親にも増る命の親心の如何にと

宣へば。勘介一眠くわつと見開き。扱は兩家の君達のや。某しは山本勘介晴幸と申そ者。輝虎の御家臣直江山城。我が爲に妹嫁のたぐ。縁有るれ二人の。恙なきこそ珍重く。村上が領分に片時も猶豫御無用。早疾々との詞の下。供人引連れ落合藤太。あれ遣すなとせつと来る。ム、打揃ふて御太儀千萬もう草臥も息まつたり。刀汚しの蠅待此蠅打喰へど。松の木取て片足飛。ひつしくと打殺せば。敗亡敗北大史公の。粥にわらぬ棒喰ひはつと一度に逃散たり。藤太透さず勝頼遣ぬと切掛る。振返つて是やさせぬ青蠅めと。横に薙れば二ツに断れ腸亂れ死してけり。さあく敵の根切たり。國境までお供と云はんも此足元。老母も氣遣御縁もあらば又重ねて。随分御無事で。其方も無事で。然ばく一禮述別れて歸る勘介が。仁の玄徳智は孔明。勇は關羽に并びなき。譽れの三國名の高さ。富士と移して諏訪の不二。御狩の手柄の猪に乗る。夫れは仁田我の油断。猪にのけられ五体不具。缺れば満ち満れば缺る弓張月や梓弓。引の片足らんがちが。敵の根本隻目の謂れは是れ。此々々猪と止たる勘介が。譽れと代々に傳へけり。

第二

嶺繁として三度願見るは天下の謀計とや。武田信玄大僧正徒士馬廻りと麓に留め。原五郎昌俊一人御供にて。又踏み分る木曾山蔭。降り積む雪に道絶へて山の水晶と植たる如く。林の白銀と粧ふに似て人目も共に埋もる。爰にも住ば住居とる。山本勘介晴幸が庵の門に着給ふ。原五郎雪中にのしこまり。此寒風に御馬にも召されず傘もさへせず。何所へ御出と存せしに徽浪人の庵室。若御用ばし候は、君の御成までも無く。我等引立參らん物と。甲斐の信玄と云ふ名將。此大雪に歩徒跣。慮外乍ら餘り賞た事でも無し。いざ御歸りど袖に絶れば振り放し。何ぞ知て若輩者。此勘介の隻目跛の小男。見掛の百姓山賤の如くにて。魂の日本の楠異國の孔明。孫呉にも劣らぬ軍者。諸方より招け共。主人の器量に撰り嫌ひして奉公せず。今信玄が軍師に頼ん者。勘介ならで日本に覺ぬす。先月兩度此庵室へ尋ねしのも。他行とて對面せず。今日のは是非にと志し。麓迄牽せし信玄が乗替に非ず。勘介と乗る馬なるぞ。師と求むるの神の恵みと求るが如し。随分禮義と亂とな。但寒くて堪忍成難くば麓へ下て誰替れ。無氣根者めと遣還られ。是程の雪に何の事と雪に兩

足踏込で。巨燧に煖て居る様な。豊年の印やら今年の雪の煖など。云ふ唇も紫色立ち齒の根も合はぬ寒さなり。内にも積る頭の雪主の老母と覺て。折焚柴の夕烟り。煤る顔も煎じ茶の。はな香も濺く聞けり。へん嬉し今日こそ仕課せたりと戸口に立寄り。卒爾乍ら山本公の御名と慕ひ。先月兩度参りし其御他行。直に申し談じ度く此大雪と踏分る。斯申すは武田信玄。取次頼み存ずると事と慎み宣へば。武田信玄との聞及ふ様な。足冷て焚火の許と得放れぬ。用があらば其所明けてと手枕乍らわひしらふ。然ば御免と戸を開き入給へば。起さも直らぬ老母の体原五郎くわつと急上。大体人の尋るに換撥も有るもの。但し枕も上らぬ程虫でもあぶるの。此寒氣で寸白でも起つたの。ぞれ其寸白の虫捨り殺して本復させんと。立んとすると信玄はたと睨付。彼方より呼ばるゝ我にも非ず。押掛て参るのらひ辭儀の此方。不行儀者退り居ふと叱りつけ。聞も及び給へん越後の國長尾輝虎と。仔細あつて鉾楯の中となり。此信州と戰場にて近々に輝虎と對陣す。惜しいな勘介奇代の才智と空しく。山林に朽果ん事残念至極。我師範となり三軍と司り。弓箭の力と助け給は。百萬の士卒に優り。信玄が大慶是に過す。萬卒の求め易く一將の求め難く。

三度是まで歩行と運ぶ志し。御老母の執成偏に頼み存ずると。師弟の禮儀細かに低頭平身手と束ね。世に染々と連絡へば。母起も上らず齒の抜たる口と明き。あらくくと打笑ひ。物好きな信玄殿やの。此方の息子に幼稚時より山家住居。野飼の牛の手綱は取れど。掛鞍に一度腰掛す。薪木の枝の切れ共。人門の指一本遂に切た例しもなく。足は跛で遠道ならず片目の隻で見事不自由。脊丈小そふて棚な物下とも。間に足らぬ山本勘介軍の大將といくく。此國の大名衆から。抱へ度と云ふて來れを取敢もしませぬ。其爲の御入來なら早ふ歸るが手柄。冷る事やと圍爐裏に踏出す拗強者。原五郎堪り兼。殿申さぬ事の役に立ぬ素浪人。何も世間の風説。作法知らぬ婆々めが子なら知れたく。お歸りと立んとすると信玄又睨付。主人の撰み給ふと聞及ぶ。信玄其器量なけれど思ひ掛し一念。日の光りが月に替り今日が明日。明日が明後日になる迄。主従師弟の契約致さぬ其内の。信玄が骸と此山に埋む計りぞと。座と占て在します。賢者と求むる良將の心遣ひぞ類なき。老母起き上り。叔々聞分ないしつこいお方。左程に思し召ば事に因て勘介と。奉公に参らせん然乍ら。鶴の枯木に巢と造す。大魚の小池に住すと云ふ。勘介と抱へんと

思し召さるらり。此方も主人の御器量と撰ばねばならぬ。信玄公の軍法。如何なる心と以ての兵と用ひ給ふぞや。軍慮の程如何にくと座と打て云ひければ。心得たりと突立自在の下に焚捨し。櫓押退て柴の小枝と押折く焚給へば。烈々と燃上り茶釜に沸る湯玉の音。漣寄する如くなり。信玄が兵と用ゆる事まつ此通りと。指差し給へば。老母横手と磔と打ち。天晴大將候よ。柔能剛と制し弱能強と制す。黄石公が三略と得給ひし頼母しく。是の奇正の中にも正の軍術。扱て心と以てする智謀の如何にと又問掛れば。心得たりと外面に出。雪間に餌る群雀一羽取て手に握り立歸り。如何に老母我掌中に雀あり生たるの死たるの。云ふて見られよと宣へば。天晴奇代の謀計。婆が生たりと申さば御掌中にて握り殺して見せ給らん。又死たりと申さば其儘開きて放さるべし。是敵に依て轉化し。何方も外さぬ兩全の謀計。卽座の答へ、名將のな。一子勘介が主と頼むの信玄公と慎んで一禮し。いで御目見え申させんと二間に入れば信玄公。夜光の珠と得し如く。五郎も案に相違して。扱も強い婆々めぢやと。舌と巻てを見ぬにける。程なく奥より山本勘介御目見え。誰御取次と呼いつて。品皮絨の糸毛の鎧揃て締たる上帯も。二重鎖の小手脚當。元

蠅頭の黒塗兜猪首に着なす片足の。蹴らがくがつくりそつくり凸凹の。山本勘介晴幸御目見ぬと畏る。我等原五郎昌俊と申す者。御近付にと躍り出。名にしあふ晴幸殿。御目見えの証なふての叶ふまじ。太刃打の鎧の扱の立見の。いざ昌俊お相手と引立る腰のよるくく。重き六具に五躰と釣れ。うつばと臥て足立ねば。鎧と着てさへ其憶病。鯨波聞いたら目が眩ふ。馬に乗るより手短に。楯桶に乗れ勘介と大口明てぞ笑ひける。なふ然のみ笑ひ給ひそ。勘介の此度猪に掛られし疵養生。夫婦連にて箱根の湯元へ湯治致し。只今家に在合せず。主従の御契約留守と申すも恐れあり。此鎧兜の我子の着用武士の魂。魂さへ御目見え相濟は勘介も同然と。母が契約詞違ぬ印に。是此鎧兜と着たる勘介母とな思召されそと。御前に蹲鋸ば原五郎くつとも云ひす。大將信玄御悦び甚だ感じ入給ふ。今より主従三世の契り安堵の所領三百貫。子孫に傳ふる弓矢の道。指南頼むとありければ。はつと首と遷に措付。五体不具の勘介斯るお主と儲し事。實に一眼の龜の浮木ぞや。武士の何時晴々しき出陣出仕も有らふと。嗜みの打物衣小袖是御覽せと引寄る。破れ葛籠に遷み込む。幌衣小旗陣羽織。腕も通さぬ衣々に子と思ふ親の襦袢と。合せて其身が

勘介に成代への應答。親も親なり子も子なり。原五郎愼んで。雪も頻に日も傾く。早々御立と麓に向ひ。お供參れと呼ればお徒土お小姓鎗長刀。召馬引馬雪に嘶て引立たり。迎もの事に勘介も御供申させんと。脱で差出と元蠅頭主徒結約の金兜。御手に取て押戴き。滑濱に釣せし太公望。同車に乘し帝と學び。勘介も馬上にと乗替の鞍壺に。兜と取て打乗する山形鍬形忍びの緒。結ぶ庵と龍頭。天にも上る心地して勇んで甲府へ。

衛門 姫道行

雪と踏で花のと惜むそはのげの。谷水も静ならで騒が敷き木枯しの。山風に散る木の葉まで。追手の聲やらんと後とのみ深山路の。奥深く急ぎ行末の便りなき身の便りに。身に引締し旅衣爰や彼處に着古せど。生れ付たる衛門姫女心の細道も。後強しや勝頼の影と我影四人連。憂も愁さも世の外の。跡に見捨る桔梗が原。木にも草にも馴ぬれば。散る別れさへ惜まる。あれなふ御覽せ勝頼公春の行衛と尋のね。二連たる雁金の妻持顔に飛連て。餘所の嬌に恥よと鳴り面憎や。好た男と連て行く。身に厭ぬ聲なれど。あな喧まし。山々の高嶺くと見上れば。雲の波たつ諏訪の海。深き情も。在原の中將なりける豆男。

戀ゆへ旅と信濃路や。淺間が嶽とつらねける。山の烟りも我思ひに。丈も及ばし富士の山。雪の肌は花の顔鹿の子班の雲の帯。肩に素縫の金紗の千鳥。裾野の模様望月の。駒の追風ろよ。戦ぐ。松の葉のよな狭い氣と持やんな。廣い世蕪葉の氣と持やれ。トよしや辛氣や其裏戻せ。廣い世蕪葉の世の夢と。覺て昨日明けて今日。昔ての翌朝の月日とも。頼みし甲斐も越後路も。皆古郷となし果て。同じ愛身の人心二に割ば爪生坂。頂嶺岨々と冬枯たり。見初し花の頃。夏の通路足はやく肩へ涼敷夕風に。萩萩芭はにはに出てさんざらめけば。松虫鈴虫響虫。露も交りてはらり。紅葉土産に秋も井に氷の厚く我袖の。臼井峠の入日影暮相近き群鳥。聲の有れ共里の名の。問れず云のす櫛取らぬ。黒鬘山の宵の闇篠と突くなる吹降に。雨具の持す宿のなし。野邊にいふせき東屋も。昔の玉の臺のと立寄憩ひ給ひけり。直江大和之介時綱姫君見えさせ給ひぬ故。主君輝虎の御憤怒兄山城へも而伏。本國へも立歸らず若やと三河遠江。尋ぬる甲斐の隈もなき月の入より降雨に。あゝせの簀笠身に纏ひ。目指も知らぬ黒髪山上州指て急ぎしが。鍬の抜ける宿の遠し雨露凌ぐ木蔭もがなど。此所彼處透し見て。是や何ぢや。ヤ。辻堂屈竟く木賃入らずの

上宿と。探り寄たる様の上旅人と見えし侍の。同じく簀笠引冠り踏延したる高野。よ、世界に廣し我に變らぬ愛旅人。相宿御免と足押遣て腰打掛。叔々歩く間の張合にて雨も風も身に染ず。氣が緩む程勞れも出る。吹放しの辻堂借ふと云ふて蒲團のなし。斯様の時の用意の酒許由が捨し瓢箪も。我等が爲の夜着蒲團と。腰に着たる水飲にだぶだぶと一請。一軍の食一瓢の飲これ顔回が樂みと。一引二引惜み飲たる樂み酒。傍に臥たる侍ましくしゝたる頭と持上げ。相宿へ辭儀も無く羨がらす無禮者。盗んで彼奴に鼻明せんと。探り寄たる手先に瓢箪大膽者。口のら口へ一刻飲元の所に密と置き。虚寝入して臥たるの可笑くも又肝太さよ。時綱一ざらりと乾。堪らぬく自身を押へ最一と。取上る瓢箪のひよつこり輕さの不審乍ら。注掛れば重もなし。是や如何ぢや溢れたる洩たの。吸て取らんと撫廻れば。旅人の息の酒臭さ。よ、叔の此奴と胸倉取て引摺下し。よ、鈴盗人は音にて顯れ。酒盗人の臭氣で知る蔽しても隠させぬ。よ、此瓢箪の酒返せ否と云へば首が飛。返答次第直二と。刀に手と掛誂のくる些も憶せず。ハ、我意くと喧しい飲だ酒と返せとい。法と知らぬ侍殿酒戻しらせぬ物。成らば二にして見よと嗣と据たる詞の端。大和之介聞答め

。然云ふ和殿の武田の郎黨高坂で有りざるや。よ、我名と知りし御邊の如何に。長尾の執權直江大和之介。よ、大和殿。高坂殿。是のくんと手と取組。暗がり紛れ危ない事互に息才珍重く。勝頼公の御在所の。然ばく東山道と心懸四五ヶ國尋ねても。今に於てれ行衛知れず。假令お二人腐り附たる御中なりとも。一旦縁と切らせ兩方引分お供して歸らでい。腹と切ても事濟す。若御短慮にて御身と失ひ給いんと。勞いしさも先立案と過しがせらるゝと。互の愛と語り合落涙すること道理なれ。勝頼夫婦も此辻堂宵より臥して在せしが。叔は高坂大和之介我々故に苦勞の旅。逢ば縁と切せんとの詞にはつと胸轟さ。息と誂てぞ忍ばるゝ。時綱重ねて今日暮前甲州堺と過し時。百姓共が遊騒ぎ甲斐越後確執にて。近々戦争の御用意と語るも有り。又兩家の不義の名と立し本の起りの村上義清。信玄も輝虎も先手合せの戦争に。義清と攻給ふ共區々の風聞。何方にもせよ聞捨難く一先國へ歸る覺悟。慥な沙汰の聞れずや。よ、某とても慥に實否の聞のね共。夜明次第本國へ罷立。主人と主人の戦争に治定すれば御邊とも敵味方。對談も今宵ばかり最何時ぞ八ツか七ツの雨も降止。よ、く南の山に雲断れ。くいつと朱さの月日の出る方角ならず。不思議くと見る

中に雲と焦せる兵火の光り。ぞんく響く攻太鼓風に連れたる鯨波。耳と突抜く計りなり。大和突立聞きしに違はず兩家の戦と覺ゆるぞ。安閑と見る所でなし。尋ぬる主人の行方知れず。空然と手振で國への歸られまい。今云ふ通り主君と主君の鬪戦なれば。爰の御分と我戰場。こい兩人討果し。高坂が首と土産にとる。時綱が首と土産に遣の此上に分別なし。立て勝負と云ひければ。早まるな時綱差す敵の義清と指置き。武田長尾の合戦と審し。那火の手村上が小諸の城の順道。敵の不意と討給ふ夜軍と覺へたり。兩人が首より村上が首取て土産にとるが近道。さ、さうよ／＼本道の廻遠し。直にうてば一里余り戦争果ての詮ない事。率行くまいの尤々。時刻移な時綱まつらせ暗いぞ。山坂高坂合點ぢや。まこいやつと。踏たる足阿叫の二天飛が如くに駈て行。跡に夫婦寂然と身と悔みたる泣泣。良わつて勝頼病痾の少し癒るより起り。孝の少艾より劣るとの必至と胸に思ひ知る。我愛惜に親々と修羅に導く不孝の大道。あれ見よ子故に怒る噴恙の兵火。勝頼程の者が色に迷ひ民百姓の患苦と。餘所に見んも本意ならず。爰に父の目無く共月日の父の兩眼。父と父との合戦し子と子の妹脊の語ひ。天の照覽恐るし。義と見て爲ざるの勇無

し。是より夫婦引分れ。今迄積し窮惡の非と改むれば。孝も立義も立互に心残れ共。御身も輝虎の娘。輪廻の詞無用ぞとすげ無く云へど目の涙。泣き顔墮て衛門の姫。せつなき戀と義に替て添われぬとの御詞。道理なり然乍ら。親と親との鬪戦やら村上との戦争やら。誰が知らして誰が知る父の軍に極らば。成程添ふまい思ひ切らふ。若義清退治の上。互の心打解和談有るまい物でもなし。添る添ぬる縁と切の切ぬる。堺の夜明て知る事それ迄の變らぬ女夫。何程不孝に成ども半時や一時の眼離りない。何の無しに莞爾と互に倦程しめ合て。覺悟させてと抱き付。そ、時も時折も折未練至極と。突放せば。又取付。那方へ退ば此方へ慕ひ。纏る袖に引る、心未練くも戀慕の暗。未來と照す辻堂も。妹脊の臺となりけり。既に五更の一天の鐘に落來る村上義清。武田長尾の兩勢無二無三に切立れば。太刀も兜も打落され身に添物の旗指一人。轉つ傍行の、泥塗れ命からく逃延て。太息とほつと次ぎ。そ、無念口惜し信玄輝虎中違はせ。彼鳴叫の鬪戦にて兩國と擱まんと。日頃の奸計がらりと違ひ。却つて彼奴に夜討せられ家來と討せ城と拔れ。れめく／＼と存生るも命が物種。此恥辱と取返す一ツの計略能聞け。信玄が領分の海邊なき國なれば。遠州鹽の

運漕にて諸人の喉咽と濕と。我遠州の氏直に兼て入魂所縁も有り。氏直に手と束ね頼入
 れ。鹽の手と止る物ならば。鹽に飢へて甲斐一國の戦はずして皆殺し。信玄坊主め仕て遣
 ば輝虎討の手間入らず。三ヶ國と押領し戀の敵勝頼め。探し出て寸断く切。衛門の前と
 めつくりと抱て寝るの案の内。何と思案は有る物のと。語る後に聲と掛。勝頼是にと切掛る
 。悲や伏勢やれ逃よと。一度の懲に二度の恥。投る刀に家來が首飛より早く村上義清。は
 ふく遁れ落失たり。何國迄もと駆行く袂に絶り着。憶病な村上何時殺そふと儘な事。
 此暗いに大事のお身怪我遊ばと。何と妾が申さぬ事の。今宵の軍の義清退治に極つた。
 婿や如何の斯様と。幾瀬の思ひの痛も下り落付ましたと。云ふ折しも又改まる太鼓の
 鬨子。兵火熾に数千の鐵砲。胸に應へて勝頼持たる刃がばと捨。あれこそ父と父との戦
 争今が夫婦の別れぞと。心亂れて立騒ぐ姫も駭くおろく聲。何の左様で有りまいと離れ
 方なく付纏ふ。山間にちらくくと炎焰に映る旗の手の。色も定ると分らねば延上り飛上り
 。氣も逆立し心の闇の黒髪山。夫が上れば續て上り。炎焰の下に見下せ共一天闇さ眞の闇
 。旗の黒白も見えざれば。未日の出ぬの明よくと。明ると惜む氣借まぬ氣。如何に男

なればとて餘程な思ひ切り。夜が明旗の徽章も見ぬ。兩家の戦争に極まれば添事ならぬ身
 の上に。夜が明よとの胸慾な今宵一夜と千萬年。日天様のお慈悲に出て下さるな夜も明な
 と。わつと叫び伏轉び嘆くに愁さ東雲や。万里と隔る東海の波に陽炎腫々と。たなびき渡
 る雲の白旗 幸菱。あれこそ父と武田の紋。此方に憧る、赤旗の紋の縁切桐の墓。南無
 三寶長き離別の長尾の旗。あなたの闘戦此方の思ひ。泣明したる目も眞赤に出る日の。五
 色八色染る空々雲の波。赫々暉々たる太陽の。歩行の五萬六千里。夫婦が間も幾千里。明
 て墓なき夜床の霜朝日に連れて別れける。

第三二

葉公龍と好で畫さ刻めども。眞の天龍と見て魂と失ふ。是れ龍と好むにわらず。龍に似
 て龍にあらざる物と好むと云はん。將の賢士と好む賢に似て賢にわらず。少い哉才賢の臣
 。然ば長尾輝虎。信玄と初度の合戦に勝利と失ひ。本城に勢と引入れ。執權直江山城守實
 綱。甘粕柿崎宇佐美なんど士大將召集め。今度の戦味方三萬の人数と以て。武田が一萬二
 千に駆崩され。無念の敗北骨髄に徹す。日比危ふき勝と好まぬ信玄。朝霧の紛れに大河と渡

し。切所の細道より我旗本の後へ押廻し。無二無三に駆破りし武略の鋭さ。信玄が胸中より出べのらす。如何なる軍師が敵に組し。斯る奇計となしけるぞ。汝等聞のすや知らずや。眉毛逆立て眼に角以ての外の不機嫌なり。甘糟柿崎詞と崩へ。我々も其心付ら間者に入れて窺ひ聞き候へば。山本勘介晴幸と申と浪人召抱へ。備陣取士卒の駆引。一向勘介が下知と承はると申しも取ぬに。音に聞く勘介。則ち直江が女房の兄ならずや。山城。近き縁者の身にてなせ我にの鞠めず。何と油断して敵に取られし。信玄が千石呉は二。千石。三千石遣は六千石。五千石ならば我の一萬石も呉んずもの。我家と見限りし。但し此輝虎勘介が主に不足なるの。所存あらば言へ聞んと顔色急て見へにける。直江少し驚かす。御意なくとも申上んと存する所。尤も彼が妹と相具し候へども。勘介に未だ面致さず。在郷に引込み鋤鋤取て自ら耕やし。秋の田面の月に嘯き。薪と荷ふて山路の花と友とし。世と諂はず祿と貪らず。天命と樂み義と堅く守る士。越後半國賜のるとて傳縁引と力に知行と望む勘介ならず。憚りながら君御短慮高慢にて。人に詞と下げ謙る事御嫌ひ。世の中八分に見下し。思ふ様に知行さへ遣は。樊階張良でも抱へて見せんとと思召

337116

との大きに相違。今度武田方に成りたるは。必定信玄が上手と盡して招きたるに疑ひなし。某しも余りに残念枕と割し一手段。短氣と鎮め無念と押ゆる御合點ならば。密々に申止べしと恐るゝ方なく申しければ。左しもの輝虎理に服しはく。領さ。座敷と屹と見渡せば。甘糟始め物大將残らず御前と立にける。輝虎色と和げ給ひ。是れ實綱。智ある軍師と親師匠とも尊ふの往古の法。勘介我に奉公せば。弓矢八幡脇と持せても堪忍する。其方が思案は何とく。さん候勘介幼少にて父に離れ。七十に余る老母に孝心深く。廿四孝の廻加と妙法に乗る孝行者。先母と靡けん爲女共方より。迎ひと立させ候と申と所に。直江が妻の唐衣遣戸口に差窺ひ。なふ山城殿母様先程お着。兄勘介殿の内儀様も同道。差圖の通り直にお城へ乗物入れさせ。お次の臺子の間に憩ませ置しと。聞くより輝虎。出来なく具さに聞きたし是へく。御免ある近ふ参れと呼出し。母は年寄れし機嫌の能のと問ければ。永浪人の辛苦にや腰の二重天窓の雪。十も老て見へながら行儀作法は昔に變らず。勘介殿のお内儀。お勝様にも始めて逢しが。尋常な氣高い嫂御。一ツの瑾の口が吃で物云ふ事と耻のしがり。請返答の皆筆先其上琴の上手。筆にも書れぬ急な時は。云ふ事に節

と付け琴に乗せ謠へば。如何様の早い事も。吃らずに云はるゝと母様の物語。其手の見事さ墨付筆勢。御家中の祐筆衆にも少ない程の器用人。吃が直して進せたいと語れば直江。一段々随分母の機嫌と取り。何時迄も逗留有る様に待遇せ。さぞ老牀の草臥是へ請じ。御座所に直して馳走。殿と我は障子の影にて事の様と計ひ首尾と見合せ。對面せんと主従伴ひ入りにけり。折しも床の大和琴硯料紙も座敷に并べ。唐衣廊下の欄干に手と掛。山本勘介殿の内儀様。母御前連まし是へお通り。山本殿勘介殿の内儀様母様と。請待の聲聞ゆれば。音高し。時と出し老の鶴。子に逢まで世の人の。問ふとも我は名無し鳥。名と渡さんはおこがまし。なふ唐衣。此越後は勘介の主君信玄公の敵の國。和女の夫は敵の御家老。其所へ此母が来る義理の無れども。此世の名残に母の顔見たしとの文の面。我も娘戀しと迎ひと打連れ。言舌廻らぬ嫁と力に下女も連れぬ此有様。山本殿勘介殿の母よ内儀よと聲高に云はぬ事。ヤゑいと座せんととると手と取て。直に是れへと請せられ嫁のお勝が携へし。お刀膝に引寄せ鈍す場うてぬ白書院。纏物したる袴の上威も備つて見へにける。唐衣近く差寄て。お禮申とはお勝様妾しが孝行とお一人に振掛け。老人の起臥朝夕の

御介抱。此度の道中雨に付け風に付け。山よ川よさぞ御氣盡し。詞には申盡されずと。云掛る程口籠り。只あい。いと笑顔斗りと愛想にて。硯引寄せ赤らむ顔のはぢ紅葉。木の葉の時雨さら。世尊寺様の走り書。讀人の癖に讀易き唐衣取上げ。ま。是は忝けな。いお筆の通り。姉となりとも妹となりとも。兄弟と思召しお心隔てず頼みます。扱此御手跡はいの存せぬながら美事。此半分何卒書たい事やと。くる。捲て袖に納る後より直江装束改め狂文の綾の呉服一重。肩に掛て立出で式臺深く。拙者直江山城守實綱。お國許へ罷り越し親子の禮儀申上べき處。女共より迎ひと參らせ。遠路の御光駕。祝。着是れに過す。山本氏の御内室にも能ぞ。御同道。お心易く御逗留有る様に。態と御馳走の申さず。従つて此小袖は將軍義輝公のお着衣。ニツ引りやうの御紋付主人輝虎拜領致され。一兩度着せられし斗り。當國の寒國轉寢の裾に置給は。輝虎も満足たるべしと指出せば。起直り莞爾と笑ひ。ヤレく數ならぬ此祖母が來た事。輝虎公のお耳へ入しよの。扱は爰は舞殿の館のと思へば。御主人の本丸の。此小袖と祖母に着よとの。御念の入た事やの。扱々々結構な狂文の綾と云ふ物か。流石將軍のお着料。然ながら輝虎殿が一兩度も。着給

ぶと有るのら。輝虎の古着。此祖母は此年迄人の古着貰ふて着た事がない。なふ嫌や思
 ぐしいと。詞に綾も艶もなく呉服も色と失へり。いや申し母御に着とは御挨拶。元是れは男
 模様。勘介殿の土産に成されよとの言し。否々々。武田信玄と云ふ主持て何乏のらぬ勘介
 土産に越後の名産鮭の塩引。歸るさの道に木曾川鮎の白干。信濃梅の梅干。皺の寄
 た此顔の無事と見せるが土産ぢや。喧やしや舞殿御免と足踏伸し肱枕。直江も立つに立
 端なく勝手に向ひ手叩き。誰ぞ参れ誰ぞ参れ。御時分がよし料理。何として遅はる。心
 料理人め屹と申し付んど。料理と其座の機にして。母の機嫌の鹽梅加減窺ひ。立にける
 。程なく御勝手よしとはのめき。本膳の懸盤に種々の魚鳥。珍物の野菜美味と調へ。配膳
 の侍直垂繕ひ作法正しき盪騰り。御膳召上らるべしと。烏帽子八分に指上。こそ扣へけれ
 。唐衣見れば主君輝虎公はつと驚き。是の恐れ冥加ない。云はんとせしが仔細こそ有る
 らめと。なふ母様御膳。と云ふ聲に起直り座と組ば。管領風の摺足にて膳の据振敬ひ深
 く。通ひの座に手と突。邊國の儀御馳走も心斗り。召上られ下さるべしとぞ仰せける。老
 母會釋し。客心がましい響應。殊に仰山な神前に御供供ゆる様に。烏帽子直垂の配膳。

。近習衆の外様衆の。常々女子共に給仕ささる此祖母齒の抜る口も乾く。慇懃な給仕では
 窮屈で喰憎い。勝手へ立て休息召れ。唐衣代りやと有りければ。いや辭儀は却つて迷惑
 子息山本勘介殿。勇と云ひ智と云ひ楠正成が再來とも云つべき弓取。惜い哉武田信玄に奉
 公とは。珠と泥に抛ち麒麟と繋いで犬とそる如し。斯る英雄の御老母。直江山城内縁を以
 て不思議の御出。一國に傳墨花の咲たる喜悅。今日より我も母と頼み子となる証の杯盞。
 頂戴の望み斯様申すは長尾彈正の少弼輝虎。孝行始めの給仕配膳と烏帽子と盪に付け給人
 ば。嫁も娘もはつと斗り覺へず頭と下にける。老母膝と立直しけら。と高笑ひ。長生
 すれば珍らしい事と見聞くな。鎌倉の海には猪の角で鰐釣り。攝津河の淵には麥飯で鯉
 と釣と聞きしが。越後の國に老洒落し此祖母と餌にして山本勘介と釣寄せんとは。く
 事可笑や。凡ろ大將の天より受たる明命と願見。正直自然の規矩と外さねば。天の
 時地の理に適ひ。諸卒是れに和し遂に誠の勝利と得る。總じて物には相應あり。此祖母
 が給仕に腰元女童が丁度相應。鶏と裂に何ぞ牛の刀と用ひんとは聖人の教誡。人と欺す
 偽り表裏今日の振舞に顯れ。本心曲つた釣針に。釣るゝ勘介ではおぢやらしませぬわいの

。此膳部（たんでいぶ）に手とも掛けてい恩（おん）になる。輝虎殿（てるこどの）と敵對（てきたい）の勘介（かんけい）が母。敵（てき）の恩（おん）と請（こ）けては我子の
鋒先（はさき）に緩（ゆる）みが付く。義（ぎ）もなく勇（ゆう）もなき此膳何（このたんでいなん）にせんと。すんぞ立て懸盤（かけばん）ぐいらりと蹴返（けかへ）せ
ば。膳部（たんでいぶ）亂（みだ）れてひつた直垂（ひたれ）。膝（ひざ）に味噌汁（みそじゆ）となし。魚（うま）より驚（おどろ）く嫁娘（よめ）。ハアと肝（かん）と冷（ひや）して
惘（あきら）れ居（ゐ）る。短慮（たんりょ）の輝虎（てるこ）くわつと急（いそ）上げ。憎（にく）い死損（しそん）ひ小袖（こそで）と呉（く）れば古着（ふるぎ）杯（さかん）と蔑視（さみ）し。剩（あま）る
へ天子將軍（てんししやうぐん）にも給仕致（たまひつかせ）さぬ。輝虎（てるこ）が据（す）たる膳（たんでい）と膳（たんでい）に掛（か）て踏散（ふみち）す損才（そんさい）。狂人（きやうじん）同然（どうぜん）と思（おも）へとも
堪忍（かんじん）ならず。皺首（しわくび）勿（な）んど重代（ぢゆうだい）の小豆長光（おまひながひかり）。二尺五寸（にせきごすん）に手（て）と掛（か）け給（たま）ふと。直江山城（ちやうざんじやうじやう）飛（と）で出御（でご）
手に絶（た）れば。唐衣母（からぎぬぼ）に取付（とりつけ）き。お詫（わ）ごとく心（こゝろ）と揉（も）む。何（なに）の詫言（わごころご）聲（こゑ）の主人（しゆじん）。手向（てむか）ひもせず
もせぬ。手（て）に掛（か）らんくと刀（かたな）抱（かか）込み立（た）たる義勢（ぎせい）。其（その）喉止（のどどめ）ん放（はな）せ直江（ちやうゑ）。是れくくくく
膳（たんでい）と持（も）せても堪忍（かんじん）するとの御誓言（ごせいごん）は何（なに）と。禮儀（れいぎ）の此所（こゝ）と制（せい）しても。身（み）と震（ふる）はして無念（むねん）の涙（なみだ）。
中（ちゆう）にうるく。嫂（あひな）が心（こゝろ）急（いそ）く程口（ほどくち）廻（ま）らず。拜（おが）んで廻（ま）りつ起（た）つ居（ゐ）つ。詮方（せんかた）なくく。泪片（なみだ）手に琴引（ことひ）
寄（よ）せ。琴柱（ことばしら）と律（りつ）に調（しら）へ替（か）へ。許（ゆる）し給（たま）へ老（らう）の身（み）の。力（ちから）に足（た）ぬ屹（かた）の不具（ふぐ）者と頼（たの）みに預（あづ）けしは我夫（わがつと）
。預（あづ）かるは姑（しよとめ）。甲斐（かい）なく爰（こゝ）に捨草（すてぐさ）の。露（つゆ）より脆（もろ）き命（いのち）とや空（そら）しく枯（か）し帶木（おびぎ）と。無常（むじやう）の煙（けむ）りと成（な）
し果（は）一人（ひとり）凄（せ）く歸（かへ）るさは。拾（ひろ）ひし骨（ほね）の供（たま）として夫（つま）には何（なに）と語（かた）らん。替（か）りにい我命母（わがいのちぼ）と助け給（たま）給（たま）

へ。お慈悲（じひ）ぞやお情（なさけ）とわつと叫（こゑ）び。彈捨（ひやうすて）の琴（こと）に身（み）と投げ伏（ふ）沈（しん）む。鬼（おに）と欺（あざ）むく輝虎（てるこ）も。哀（あは）れ
に心の緩（ゆる）むと見て直江（ちやうゑ）追取（おひと）り。御免（ごめん）有（あ）るぞ女共（によども）。母（はは）と誘（い）ひ我館（わがたね）へく。有（あ）難（なん）しと一禮（いちらい）
に。お勝（かつ）が嬉（うれ）しさ物（もの）云（い）ひたげに。頭（あたま）と振（ふ）斗（と）り足（あし）も付（つ）ず躍（な）り臥（ふ）。情（なさけ）の花（はな）の御所（ごしよ）櫻（おう）。枝（えだ）のゑ
ゑちりな。ゑちりなゑちりな。越（こ）後の。御繁昌（ごはんぢやう）と祝（いわ）ひ勇（ゆう）みて日（ひ）と送（おく）る。北國（きたくに）の爰（こゝ）にも
已（おの）が時知（とき）りて。是（こゝ）より北（きた）の古郷（ふるさと）と慕（した）ひてこそは歸（かへ）る雁（かり）。況（まじ）て老（らう）の身（み）の今日（けふ）歸（かへ）る翌日（あす）歸（かへ）るぞ
。堪（こ）へせいなき老母（らうぼ）の心（こゝろ）。随分（ずいぶん）慰（なぐさ）め留（とど）めよと殿（との）の仰（おほ）せ。御家老（ごけらう）の姑女（しよとめ）御前（ごまへ）家中（ちやうぢゆう）重（おも）じ。毎日（まいにち）
の進物（しんぶつ）四季草木（しきそうぼく）の造（つく）り花（はな）。屏風（びやうぶ）掛物（かぶつ）歌書（かしょ）物語（ものがたり）。或（ある）は囀（な）る籠（かご）のとりく。奥支關（おくし）の取次（とりぎ）に解（と）
狭迄（せま）積重（つみかさ）ね。高田（たかた）の局（つ）が披露（ひやうり）にて女房達（にようだち）の取捌（と）り。表使（おもてつか）ひの進物帳（しんぶつちやう）筆（ふで）と摺（すり）く隙（ひま）はなし。時
に信濃界（しんぬ）の番所（ばんしよ）より急使（いそつか）到來（とら）し。今朝（けふあした）未明（みめい）右（みぎ）の目（め）は隻左（せうざ）の足跡（あしあと）の侍（さむらい）ひ御關所（ごかんしよ）と通り候（まち）放（はな）す
何方（いづかた）より何方（いづかた）へ行く人（ひと）と名（な）と尋（たず）ね候（まち）へば。甲州山本勘介（かうしゆざんぼんかんけい）と云（い）ふ者（もの）。御家老（ごけらう）直江山城（ちやうざんじやうじやう）殿（どの）の御
内證（ないしやう）へ行くと申し。供（とも）の人馬（にんば）とお國堺（くにさかい）に残（のこ）し通（と）られし故（ゆゑ）。脇道（わきみち）より遮（さ）つて先（ま）お報（しら）せと申置（まを）
てぞ歸（かへ）りける。局手（つ）と拍（た）。是（こゝ）は目出度（めでた）い。山本勘介（さんぼんかんけい）とはお客人（きやくじん）様の御惣領（ごそうりやう）。則ち奥様の
兄御様（あにごさま）。申置（まを）たらさぞお悦（よろこ）び其間（そのま）に腰元衆（こしもとしゆう）。お座敷（ざしき）奇麗（きれい）に掃除（そうじ）しやと。云（い）付け奥（おく）に入りけ

れば。手々に雑巾どりの羽箒、掃つ拭ふつ立騒ぎ。なふお大知ての勘介様は奥に御座るお勝様のお連合。隠れもない軍法者功の武士なれど。片目隻目に敵じやげな。此方は吃々何と思やる。お寝間の睦言が不自由に有るまい。何のいの吃で物が云れいでも。肝腎の時には「ふん」で濟事。男の氣轉で隻目は愚の。兩方見へぬ眞の闇にも。夜軍の早業は手走のい。一番乗に抜目はないとぞ笑ひける。上臺所に局が聲。奥様お城へお上り。板の間へお乗物廻しや。お供の衆とさめき裏門開く音して。高田の局立出。是れ何方も。且那樣今朝よりお城にお詰なさる。御相談の事にて奥様も今御登城。御夫婦御城よりお下りなき中。勘介様御出なさるゝとも。必ず「母御様お勝様へは先沙汰なし。此所でお茶上げね菓子杯で。御馳走致せとの仰せ有と云ふ所に。山本勘介様御出と。小取次の撫子が案内にて。旅装束の立付に膝の捻れてちんがらが。左蹴に右隻目雪折松に星一ツ。葉越に見ゆる男振座敷に直れば女房達。ふつと吹出と可笑さ。エントに紛らしてお次へ笑いに立つもあり。御茶小姓がくつゝ。手と震して茶碗の臺溢れたもたふ斗りなり。細瑣と願みぬ大丈夫。笑ふも誇るも何ともなく。其方の局。山城殿の御内室唐衣

此。身が來た通り取次頼むと有りければ。公用に付き夫婦共に登城。未だ城より下られず先此所で御休息。お煙草益お菓子とあひしらふ。公用ならば歸りの程も知れまじ。山州夫婦に用ひりない。老母の氣色以ての外との便に驚き。夜と日に次で罷り越す。早く母の顔見たし案内頼む。罷り通ると立んと。申しお母上様は一段と御機嫌能く。爰許へお越なされてより噓一ツ遊ばさず。御家中の持離し毎日花の鳥のど。數々のお慰みと云ふ程氣遣ひ。然らば女房勝に逢申そ。いやお勝様も御機嫌能ふお母上様のお傍に。遣付御夫婦お下りに間も有るまじ。それね風呂急がしや。少とお休みなさるゝ爲お枕上げましや。おはんに氣が付なんだ。お慰みに御酒上げましよと。残らず立て入りければ座敷には。客人獨とはんとして手持悪く。心得ぬ屋敷の体。母の大病十死一生只今の命も知れずと。女共が自筆の文見るより前後辨へず。駈付しに病人ある体とも見へず。母の一段機嫌能し迎女共にも逢せず。殊に公用に付山城か夫婦連にて。城へ上るとは輝虎程の大將が女交りに。國の仕置軍評定するでもあるまじ。是ぞ不審の第一。今氣が付た母と囀に掛て此勘介と。味方に招き取る談合鏡に掛たる如し。血と分し妹なれども夫と持ば夫

の爲。主の爲と思ふ唐衣めの尤も至極。大阿呆は女房の吃め。輝虎の智略にて母と馳走し。一家中尊敬するに心奪われ山城に欺し込め。息才なる母と萬事限りとの文と以て。我と釣寄せまんまど敵國の袋へ入れしよな。後悔千萬。一應も再應も念入る筈の事。母の生顔最一度見たし拜みたしど。思ふより外他念と失ひ。ふのくど踏出せし勘介が一生の鹿忽後代の笑ひ草。いやく片時も留まる所でなし。母と奪取り立退て鼻明せんと立上り。見やれば奥に間敷も多く案内知らず。門と出て後の堀とや乗るべし。一代の難所我爲の鉄拐が嶽越。心の山坂蹴馬行さつ戻りの思案最中。誰が知らせてや女房お勝走り出。コッ。斯様と斗りに取付く所と。物とも云はず後様にはたど突退け駈出る。又引留めて。オチオチア。なん何とワ、ワロくく、狼狽てござつた口こそ叶いぬ。此方のニョッによん女房。勝か預つて来たのらら氣遣ひちやらつちやるな。頼がてばばば。祖母様連て扱て歸る。扱て戻ると心の云へ口は。ぬんくぬんと斗りにて涙の聲に先立る。舌も廻らぬ。頼のら何と狼狽来たとは。三界に只た一人の母今と限りど云ふ文に。狼狽るが不思議の。夫の狼狽る文書し何者に頼まれた。オチ誰に頼まれたと云へども更に覺へなければ。恨しげに

夫の顔に指し、虚のいのと泣沈む。虚か實の其文爰に懐中せり。汝が手跡は見よと投出せば。さつと披き見れば我手跡。カ、カ、カ、悲しやコッ。此手が腐る。書いせねども筆々筆の私が筆と。繰返し能々見て。夫でないく。似せた似せくさつた。似せ居た奴詮策して。生て置ぬと走り入ると。是りや待て阿呆者。詮索とは誰と詮索元來似せらるが汝が通り。物と似せるに手本が無くて似せらる。物じて敵の國へ入る時の起振舞に氣と付け。一言半句の詞とも慎み。油断せぬこそ男も女も武士の心掛。唐土蜀の單福が古事なと常々に聞きながら。うのくど書散す故に似せられ。跡で詮索恨み云ふ程耻の耻。無念や一生敵の計略に乗せられぬ晴幸。母と云ふ字に心眩み敵國へ踏込しは。汝が筆先不覺と取らせし。夫れでも山本勘介が女房とばし思ふのど。がばと蹴付けはつたと睨む片目の光。月日と星の三光の一度に照すのど身に應へ。わつと叫び入りけるが。淺間しきは不具の身。國と離れて今日の日迄。夢にも心休めず油断とては。無れ共。流石の女子どし。煎じ茶の夕暮雨の夜の。徒然。度々に琴も引れず筆先の物語り。反古と誰の拾ひ集めて手本とは。なしけるぞや。七年先の。懐妊五月めに小産し。

血の騒ぎに舌縮まり。生れもつゝのぬ吃となり。筆と舌にて物云ひし。思へば身の敵是が癒る物ならば。口側と切裂き。舌の根と引出しても切て死さまに。彌陀の六字の名號と。唱へて死たいと。掻口説き身と悔み廻らぬ舌に。急掛け。縁のけて吃らぬ物は涙なり。不具と悔む身につまされ。天魔と欺く勘介も不便彌増涙ぐみ。先年の小産より吃とてそれを天命誰との恨みん。我も猪の難より五体不具になりたれど。畜生に恨みなく魂は元の勘介。和女も吃に心と屈せず。始めの性根と確りと据へ實晴幸が妻ならば。勝手は知たり奥に入り母に知らせ盗み出せ。我の裏の塀と乗り安々と退べきが。和女は何と。ソコソコ夫れで此方の。女房の。おんでもない事七生迄も女房。長まつたと駈入る今の噂々の。世界の噂の手本なり。チ心安しおしこぶぞ改めぬ旅出立と。勇みて出る透垣の蔭人聲して。勘介歸とな無体に歸らば討留よと。十文字の鎗先照る日に輝やさ舞いたり。峰に指れ益ない事と。庭にひらりとおりしも路次の木履片足。短のさ左に確りと穿き。隙につぎして兩足揃の高低なし。一ツの目玉に八方見廻し立たる所に。後と取切る片鎌鎗向ふよりは十文字。

前後一度に突出せばまッのせと開く四寸の身。鎗と鎗とがかつしと當つて結んたり。ためらふ間も無く拷り引又突掛る上下の穂先。下段に来ると木履の齒にてはつしと踏止め。上段に突汐首もどめてと延て喉と取れば。取られし物と堪ゆると兩手と掛けて。ヤクつと引奪り石突と追取り伸。二人が頭ばた。したゝのに打き付られ鎗と捨て走り込。組で留んと無刀の男大手と擡げ飛掛る。脇の下と掻潜り太股掴んでどうと打付。腰骨踏へて小膝と突ば。間も透もなく七八人左右より組掛る。弓手に擔いで馬手に投越し。馬手に擡いで弓手へ投越し引擔ぎ。筋斗打せる手利の早業。敷れし男も肩息にて一度にどつどつと逃散たり。無用の隙費やし。信玄公の旗下にて討死せる迄。二人の主と取り外の縁は喰いぬ勘介。馳走しつ手込にしつ。扱々揃はぬ人の心の照降やと。木履片足で追駈行く。實綱城より駈戻り。南無三寶早歸りし曲もなし勘介。當國に足と留て貰いたき主人の懇望。甲斐の國斗りに月日の光あるでもなし。片意地も能い加減是非に歸らば。此實綱が首腰に着てお歸りやれと。隈々尋ね呼掛け慕ひ出にけり。奥にはためく太刀音兄弟嫁小姑。互ひに白刃引そばめ。恨しいお勝殿。和女の似文して兄様と呼寄せん爲。書捨の反古と集

東なやと清き眼にはら〜涙。堪へ兼て嫁娘わつと歎き伏ければ。勘介心も眼も眩み獅子王の如き輝虎も。包むに余る落涙に目と数瞬いて在せしが。堪り兼て大聲上げ。ア、敢なや是非もなや。我も人も武士の身は打見斗り美々しく。墓なき物の上はなし。あの婆々が一命と義理に捨しむ。武家の名と惜む不便さよ。鵜と云ひて魚と取る鳥有り。野鷹是れに番ひ鵜腹の鷹の子は。成長の後必ず母の業と次ぎ淵に躍る鵜と取る。侍も其如く種腹崩ふは少きに。天晴勘介が母なりし惜や非業の死とさせ。方々が哀と見る事も輝虎故と斗りに。さしも我強さ大將のそゝるに袖と絞らる。ア何とがな追善と。指添振て左の手に鑿掴み。元結際よりふつ〜と切り。家の弓矢は捨すとも妾の發心。名とも今日より改め輝虎入道謙信。切たる髪佛にも捧す。出家の手にも渡すまじ勘介に取らする。謙信が首取たる心是ぞ母の香奠。臨終の心悦ばせよ。武士の武邊は珍しめらす。汝が孝行と感入ての餘りぞやと。涙にくれて給ければ。ア、ア、有難き御情と廣縁に平伏て。涙肌骨と絞りしが。御心に随ひぬ恨と捨て重々の御懇情。申上ん詞もなし。形と心は信玄に仕へ御陣に向ひ鑄矢の射掛申すとも。切ての御思報と頭斗りは御發体の御供と。同く指添をるりと振き鑿

掴んですつかと切り。ア今日より山本勘介入道道鬼。道は道と云ふ字にて母と導く菩提の道。鬼の鬼と讀む字にて鬼神も挫ぐ道鬼入道。親の冥途の餞別と二ツの誓と手に持せ。血に塗れし膝の上額と付けて忍の泣。母は苦き眼と開き。生れ落て此年まで六ヶ國と歴巡り。遂に住所定らず丁度七十二年目に。西方安樂國と永き住所定め。此二總の切髪と瑠璃華曼幡天蓋。住家と飾る樂やな。大將に御暇とは恐れあり。嫁よ娘よ聳よ子よ然ば〜南無阿彌陀と。兩の手に二腰の刀と振ば死出の旅。桶に乗らねと道急ぐ。越路の雪と消へにけり。人々はつと斗りにて泣く〜死骸に打掛る。唐衣お勝の搔暮れて。絶入り消入り亂るれど亂れぬ武士の残り。歎きの盡す詞は盡て互ひに目禮送禮は。直江夫婦が涙の種。勘介夫婦が別れて歸る姿に謙信哀れと増し。ア待て暫し母が追善信玄への土産せん。聞けば信濃の村上が甲斐一國の鹽止して。人民士卒と惱まし鹽攻にするを聞く。卑し〜卑怯なり謙信が軍の鋒先。鹽攻なんぞの勝負はせず。我越後には海有り甲斐の一國の鹽に事缺せず。馬車にて續くべし軍兵の精力堅くして。我と合戦せられよと信玄に傳へよ。ア、ア、重ね〜情有る詞のしほに身の歎き。涙滿來る斗りにて御暇申す武士の。情は恩怨の怨胸と二ツに

押隔て。横ひりふせる甲斐がねの。弱味と見せじと包めども。枯て甲斐なき柞原。影と離れて別れ路の。跡に引る、足弱車。片輪車や廻らぬ舌の、吃が盡せぬ名残。筆に書れず謠ひれず。泣つ叫んづ足もどる身もどる。歩み兼ねれば力と付け引立引れて。心と残して、くかん、歸りけり。

第四

秋の山。紅葉の床に牡鹿の寝たよ。しほらしや立抜に露霜織し。錦の山の楓葉楓葉の流る川と。渡らば錦中絶ん。牡鹿の渡らば中絶ん。こうさんしうの秋の色。白根が麓の並木の紅葉。落来る鹿と射止んと心も猛き武夫の。矢叫びの聲響き入る天目山の森の蔭。高坂陣正原五郎左右に別れ。白木の弓に鉾矢番ひ狩廻す。信玄高殿の簾と押し遣り乾度見給ひ。ヤけしからず。餘人の殺生とも禁むべき身と持て放逸千萬。我軍法工夫の此高殿と建ん爲。當山と切開のせしに。山神の崇り天狗の障得。狐狸の禍ひ天目山の變化化物と。一國他國恐れし故我山神と祈り。當山殺生禁制の誓と立。一千首の和歌と詠せしうば。誠に和歌の天地と動し。鬼神も感ずる威徳にて。山神の怒も解變化の崇りも鎮靜て。高

嶽を始め休所まで悉皆成就し。春の花の且秋の紅葉に心と澄し。軍法の工夫に紛る、方なと思ひと凝す所。何ぞや弓矢と帯し鹿と射んと。我詞と輕しむるの山神の崇恐れすの。然なく其子の思ひ妻戀のねて興山に。紅葉踏み分け鳴鹿の心の哀と思ひすや。武士も物の精知る後白の乾度慎めよと。弓矢に猛き信玄公心解けたる顔ばせも。則ち和歌の徳ならん。高坂陣正政信御前近く。さん候我々御禁制と背き。鹿の子の一ツも射止べき心底に候す。態と君の御答めに預り夫と序に勝頼公の。御不興申し開らん爲の手段。子と思ふ鹿の哀れをも知し召れ。男女の中と和ぐる和歌に御身と染め乍ら。掛替もなき若君と二年の御不興山勢しや勝頼公長尾武田の日月の如き中成しに。數ヶ度の闘諍我不行跡より事起り。兩國の騒動民の歎き先非と悔ての御愁歎と。密に傳へ承る。一旦の誤りの御若氣申さば有難き道にも非らず。家中の歎き勝頼公の御不興御免あり。姫君と呼取給へば兩國の悦びと科の臣等は免と給ひ。御不興御免下さるべしと。額と土に摺付く申せ共。聞ぬ顔し返答なき。紅葉の梢打詠め空囀いてお在ま。原五郎昌俊進み出。御不興の本の密通の憎み。餘所迄もなく御先祖新羅三郎義光殿。權の平太景成が娘に密通の不行跡。世舉つ

て存じの所。密通と強く禁め給ひ。御先祖義光殿の御子孫の君と始め。人中へ頼が出されよ。免すとの御説承まらぬ其内り。一寸も爰と動じと廣言過言の大音上。信立活と御色變り。能事ならば新羅三郎と手本にすべし。如何に先祖なれば逆悪事と定規に勝頼が不興免せとの不道なり昌俊。立去れやつと御機嫌損じ高殿と下給へば。二人もはつと指俯向き詞なく立踏る。扱ひ彼等の不孝の子の恵みある父も。養ひと云ふ本文と知ざりし。山神と祭る清めの高殿。諸々の不淨聞すと云ふ。大事の耳と穢せしよな。いで耳洗ひ清めんと。灘の流れに。水と汲やらば。小川で汲やれ。小川小石川轉び合て。轉びく轉び掛る。風の柳吹き寄せて魚も錦の下潜る。向ふの川岸と傳ひ来る。眼の女子の玉襟。肩に懸て置き手拭の。山下水と汲で洗よの。住吉の久敷松と洗ひし。岸に寄せ来る白波の。瀬をのけてや洗ふらん。衣が白めばお色が黒むとよの。手まづ遮ぎる楓葉の。流に衣と濯んと。花色衣の袂に梅の香ひや流るらん。水に亂れて懸草の乾せぬ乾く隙もなき。我に愁き月日やと憂世と嘲ち懸へば。同じ思ひと打乗せて。草薙籠の二ッ文字牛の角も直なるじ。綱手薙手の千草原招ぐ芒と呼ぶの迎。爰に憶れて来る

眼の人目と忍ぶ頼冠り。互に顔と見つ見られ。勝頼様何時の間に寢れし姿お最愛や。懐しや衛門の姫。昔の面影なきとよ。苦勞召る。悲しやと。俱に凋る。泪の袖。絞らば淵となりぬべし。我も高坂昌俊が計ひにて。此頃爰に隠れ住み稀の逢瀬に此日敷。積りし愛の山々と切て語らん其橋と。渡りて爰へと招け共。愚なり此橋の其方り父の御領ぞや。免されもなく押付て。土と踏んも天地の恐れ忌ひし。なふ此國の土も木も主の君より誰有らん。我故愁き忍路の御勞しや情なや。自ら夫へと打渡と橋に臨めば。暫く橋な渡りを渡るとも。逢事難き其神の。誓ひに背くも天地の恐れ。扱ひ渡るも及びなき目に見ぬ天の架橋の。音に成りとも聞き渡る。義理に愛身とあらまされ。心と繋ぐ桂木や。糸の岩橋中々に。夜の渡りも叶いねば。顔見る計りの夫婦のや。我とても其心。傳へ聞くやうし伯陽八月に誓つて契と込。二ッ夫婦の星となり今七夕と世の中に。文月七日の私語變らぬ中と頼みにて。末の逢瀬と待給へ。實に折のらに君が牽。牛の綱手のとり姿。彼牽牛の姿よなふ。和女の織女此橋の二人が中の鴉鵲の橋。とわたる風は山々の。秋と吹越す紅葉の橋。流れの如何に。天の川。年に一度の談合の絶せぬ中と聞物と。我の夫れに引返して

去年も今年も打解て。寝る夜なければ物云いど。又來る年も如何ならん。頼むは父の御不興の免し何時と限りぞと。二人のつばと平伏て。聲も惜ます泣居たる。折節瀧の水上に集る鳥の羽打音。振返り見給へば瀧本に座と占て耳洗ふ人の後影。疑ひもなき父信玄飛立つ心の懸しさも。後に引るゝ恐しさ。牛に負せし大小喉と脇挟み牛と橋に追遣りく。切て和女の此牛牽て草薙る体にて父に近附。御不興御免の御願ひ叶ぬ迄も念晴し。我と一所に有ぞとの見付られてもあし垣の隔ぬ中も心のら。暫り忍ぶ暇が家の中に身隠れ入給ふ。信玄四方と屹度見晴し。あら面白の瀧津瀬や。夏三伏の暑と流し來る人稀に奥山の。岩のさ紅葉染め亂れ錦裁ち切る心地して。名譽なき身の名譽に天晴住べき山路よな。去にても物は過ぎる眼の前。姫の夫の縁に牽牛の手綱と搔線りて傍近く。なふ物申さん古木と枕蓆衣。流れに口と嗽ぐどの火宅と出し沙門の境界。正しく弓矢取るお身の。何故耳と洗はせ給ふ不審さよと咎むれば。優しさ女の理屈のな。流れに口と嗽ぐ計り出家といふ可らす。我子の不興免せとの理非辨へぬ人の詞。聞たる耳の穢れと此瀧に洗ひしが不思議なる。實に御耳の穢れと洗ひし水なれば。牛にのんも穢れぞと。折角奇る瀧の

綱手細。しやんと拷りて立歸る。女性暫しと呼止め。然らば我も不審あり。穢れと洗ひし水なれば牛にのんじと引歸る。昔の巢父許由にも非ず。然もあれ如何なる人やらん心床しと問給へば。申上るも耻し乍ら我の長尾謙信が娘術門の姫。勝頼様と自のら親の許さぬ戀故に。父と父との合戦。餘所に聞なし添へれずと二年この方引別れ。今日迄面と合せと勞しや勝頼様。父上御一人此深山に引籠りお在ます。若雜兵なんどの忍ひ入り御過ちも氣遣しく。すばと云はば掛隔て切拂いんと。同じく山蔭に身と忍べ共。川より南の父の領分。勘當の身に父の御領の土と踏も恐れなりと。川と隔て、御物語聞くも見るも勞しや。昔の袖の花紅葉今は浮世の塵芥。衰へも自ら故今生のお情親子の慈悲。御勘當免されば笛に寄る鹿火に入る虫。夫もへ死ぬる自らが命一ツは惜めらすと。蹶るゝ涙落瀧津水の白玉數添り。何謙信の娘とや。身と捨て勝頼が不興の訴訟は。優しやしほらしや。去ながら彼れに向ひて勘當と云ふ詞と出さねば。今免すべき詞もなく。又何と感じて許すべき程の規模もなし。勝頼が事い免も角も。御身の事は信玄何とも見捨難し。村上左衛門義清が甲斐一國の盤止して。我軍中盤に盡き力と失なふ所。敵ながら謙信の懇情。勘介入道道鬼か孝

心と美賞し。數百駄の鹽と送られし心入。古今獨歩の弓馬の達人。信玄何と以て恩報すべき所と知らず。切て和女の身の上我身に代て申開くべし。先此處に足と留られし聊る鹿略と存せずと。うらなき詞に姫君も。扱は夫の勘當も御免ある瑞相と。晦日の夜に満月見付し如くにて。只能様にと斗りなり。秋の慣ひの暮早く山と山との中空に。入る日は暗く出る月の。影も待す枝々に光り掲ぐる燈籠は。夜見よ迎や照そらん。あれ喃見給へ山々の。梢々と吹き閉てちりくばつと。誘ふ嵐に亂れ亂るゝ楓葉は。錦織てふ山姫の糸のはつしと疑はれ。錦織に花と敷く。老も若さも一時の愁と拂ふ夕景色。見て慰まん此方へと休み所に入り給ふ。時に更行く夜嵐の。梢と鳴す谷蔭より。頭に輝やく輪燈と戴き。身には千草の葉衣と重ね。歩み來る足に大地と離れ古木の枝の四方と拂ひ。化したる姿の恐るしや。勝頼屹と見御身と堅め物蔭傳ひに忍寄る。化生すはと尻目に睨み付つ戻しつ踏躡のそ。眞砂交りの小笹原。さらくくとうくくはらくく。蹴立て踏割り高殿目がけ駈登る。登しは立じと聲と掛けて。ひんづと組と事ともせず。一振振て勝頼の頭と掴んで上らんとす。ヤアのは汝に負べきかど。掴まれながら化生の眞中。突ともく身と開き。横に薙

れば五体と外し。きくくと呻り聲。微塵に成さんと弓杖三杖斗りを投付る。勝頼宙にてひらりと返し又飛掛り確のど抱。山も響く大音聲。麻呂は天地開闢猿田彦の往昔より此天目山と棲家とす。腕立して後日に祟り受るな。立去れやツと呼ひつたり。勝頼のツらくくと笑ひ。猿田でも猫田でも組留らるゝの紛れ者。神通で消るの。我人力で打殺せぬ。手際と見んと締付られ。あかく變化と引擔ぎ大地にうんとめりやと打せ。投付らるゝ拍子に連れ。頭の輪燈木の葉の衣。亂れて落れば忽ちに。村上左衛門義清が實の姿大音上。天目山に變化有りとの。世上の風聞幸ひに山の神の姿に似せ。信玄と討取んと巧みしに。本意と達せぬ無念く。父めが冥途の先駈せよと面も振す切て掛る。心得たりと抜合せ一足去らぬ劔の刃音。姫君聞付けし麓に勝頼様。義清と危なやくと呼はる聲。高坂彈正原五郎躍り出れば信玄公。構ふなく往ば一所に勘當ぞと。云はれてはつと齒切し麓と睨んで扣へたり。勝頼の打つ太刀。義清が右手の肩先胸板掛けて切付ければ。うんと反仰に反ながら勝頼の高股薙り切。兩方手の負ふ惣身の血汐。紅の深き秋の葉の楓と散して切結ぶ。有るにも有られず衛門姫籠と下りに駈下れば。加勢と見るより村上左衛門心とまくれ方角忘れ。

高殿指て逃上れば續いて上る山の原。小石に滑り踏くぢらし草と捲り木の根に取付き。澄む月影と知邊にて。逃さじ造じと力聲跡と暮ふて攀登る。下には姫君身と冷し。上にいむんづと引組で上になり下になり。起つ轉びつ捻合しがはづみと打て高殿より。遙の麓へころくく。轉び離れて村上義清橋と渡つて逃延んど。心の逸れを身の勞る。歩む小橋の目にちるく。半途渡る姫君勝頼。橋の木口と手々に掴み見るいやくと勿返せば。川へだんふと刎込たり。續いて勝頼のつばと飛込み。流れに従ひ水に連れ跡と求めて追駈る。義清も命のらく。難なく向ふに遊ぎ着き。又逃出ると逃しも立す。取て引敷首ふつと搔落し。村上左衛門尉義清と。武田勝頼討取たりと呼り給へば。父信玄思はずすつくと立上り。出来したく。それこそ我子不興許すと宣へば。各はつと土に平伏有難涙悦び涙。目に見ぬ鬼神の怨崇りも心に吞込む天目山。甲斐の白根の動きなく。猛く勇める武士の心も和ぎ楓葉の錦に包む親子の中。男女の語らひも皆此道より情知る。千首の歌の御威徳の貫之が言の葉と。仰ぎて今も感じける。

第五

百度戦つて百度勝つは。戦の戦ならざる物と云へり。武田信玄長尾謙信四度の戦ひ牛角にて。既に永祿四年九月十日五ヶ度の戦ひ。劔の刃音天に轟き。人馬の嘶き大地と穿ち。勝負と一舉に定めんと川中島の南北と限り。西條山は長尾の陣所。下米の宮の武田の備へ。信玄床凡に着給へば。旗本の左備へ高坂彈正政信。右備へ原五郎昌俊衆と計つて扣へたり。物見の軍將染田三郎。鎧に射付の矢とかけ息と切て馳付き。謙信が旗本板垣兵衛に切崩され線引に引退く。後陣の大勢と以て取圍み玉は。討取るの案の中急ぎ御勢と指向られ。然るべあらんと告知せ又陣中へ立歸る。信玄些も聞き入れ玉はず。いやく武勇の謙信脆く引べき様なし。車掛りとして先手より線引に引き。旗本と旗本行合ふ様に備へしは。謙信が家の軍法。重ねての物見と待動かなくと宣ふ所へ。遠見の士卒息次敢ず。敵筑摩川と夜の中に渡り。海津の城の通路と取切り。赤坂山に兵と伏せ思ひも依ぬ横鎧に。板垣三郎穴山主膳討死なりと申上る。然ばこそ思ふに違はず。海津の味方は敵の後と取切ざる。旗の手見すやと宣ふ所へ。海津に置れし伏懸の兵立歸り。原隼人介正國謙信の後と圍み。志田源四郎大河駿河と討取り。板垣兵衛と心と合せ前後より挟んで切立てく。

謙信は犀川と渡つて行方なく。戦は味方の御勝なりと申上れば。信玄團扇打振り。此勢ひと失ふ可らず。時刻移すな政信昌俊急げ。と宣へば。高坂彈正原五郎諸卒と引具し。馬引寄せ白淡はませ駈出す。思ひも寄らぬ祖蔭より。長尾謙信是れに在り見參やツと呼。る勢ひ。雲に羽と伸す鶴毛の駿足。一文字に乗のけ真向二ツに切付る打刀。信玄透さず軍配團扇にはつしと受。柴居と踏へ床几と去す退ば付入る請身の勝。切り込む刀の虚々實々。謙信吳子が秘術と盡せば信玄孫子が心と練り。兩翼牛角の大將。自身の働き生死の境。目覺しくも又危し。拂ひ解す刀の余り信玄の肩先。三寸餘り切下られ流る。血の瀧なせども。御佩刀に手も掛す切ば切れん頼魂。謙信馬と乗放し。憶したるの信玄。速も我に叶ふまじき所存ならば。甲と脱で降參せよ。と呼る聲に谷蔭より。武田信玄是に在りと走り來る扮装。形恰好些ども變らぬ信玄二人。見るよりぎよつと謙信も。惘れて詞も無りしが。よし。二人の中一人は似者。何方の誠の信玄。名乗で尋常の勝負せよと有りければ。以前の信玄床几と去て老頭の甲のなぐれば山本勘介入道道鬼。二人の中に涙と浮べ。某御奉公に罷り出る折から老母申し聞せしは。今甲斐越後戦ひの眞最中。汝と武

田より召る。こそ幸ひ。長尾の家臣直江山城は妹嫁。縁も有り心と合せ若君姫君と御夫婦になし奉つれ。互ひに名將の義と争ひ給ふ戦ひなれば。兩家の武勇に疵と付けぬが軍法の第一。萬一の時は一命と抛うち御中直し奉つれ。此詞忘る。なと與々申し聞せしも。今の老母が遺言となる依て數ヶ度の戦ひ。何時とても勝負の五ツ。に軍術と盡すと雖も。御中直し御縁と結ぶべき手段と失ひ。母が詞に背く悲み。勿体なくも信玄公の御姿に出立手向はず。一太刀切れしは主君の御身も恙なく。謙信の御憤怒と宥めん爲。此上の御憐愍山本道鬼が首と召れ。兩家戦いと止め給は。黄泉の母が願ひと達する悦び。生前死後の我面目偏へに願ひ奉つると。歎き入つてぞ申しける。謙信はつと感入り。實に頼母し。優しさよ天晴弓矢の手本ぞや。一命捨て道鬼が願ひ。反古にせんは弓箭の恐れ。信玄の兎も角も謙信が戦いは是迄。姫が不興も免とべしと有りければ。信玄とても其通り意趣も残らず遺恨もなし。武勇も牛角軍慮も牛角信濃一國五分。の。分取り名と取り名譽取り弓矢も既に納りぬ。道鬼が悦び大音聲。武田長尾和睦相濟み若君姫君誘ひ申せど呼れば。直江山城大和之介。高坂彈正原五郎。姫君若君御供申し皆萬歳と悦び聲。誓し

叢書閣出版目錄

●近松翁作淨瑠璃本

既刊四十二種 廿九冊出版

每冊定價金七錢 每冊郵税金二錢

●近松世話物淨瑠璃完成

- 一 お花 長町女腹切 合卷
- 一 半七 泥鯉出世瀧徳
- 一 吾妻 源五兵衛
- 一 與次郎 薩摩哥 合卷
- 一 小まん 薩摩哥 合卷
- 一 おかめ 卯月の紅葉 合卷
- 一 與兵衛 生玉心中 合卷
- 一 おさか 殺油地獄 合卷
- 一 嘉平次 心中宵庚申 合卷
- 一 お千代 心中天網島 合卷
- 一 牛兵衛 心中天網島 合卷
- 一 小春 心中天網島 合卷
- 一 治兵衛 心中天網島 合卷
- 一 一鎗の權三重帷子 合卷
- 一 山崎與次兵衛壽門松
- 一 丹波與作 伊達染手綱 合卷
- 一 關の小万 心中重井筒 合卷
- 一 おふさ 心中重井筒 合卷
- 一 徳兵衛 心中重井筒 合卷
- 一 小かん 心中刃と氷の朔日 合卷
- 一 平兵衛 心中刃と氷の朔日 合卷
- 一 おなつ 五十年忌歌念佛 合卷
- 一 清十郎 五十年忌歌念佛 合卷
- 一 おさき 今宮心中
- 一 二郎兵衛 今宮心中
- 一 梅川 冥途飛脚 合卷
- 一 忠兵衛 冥途飛脚 合卷
- 一 夕霧 夕霧阿波鳴渡 合卷
- 一 伊左衛門 夕霧阿波鳴渡 合卷
- 一 堀川 浪の鼓 合卷
- 一 おむめ 心中萬年草 合卷
- 一 乗の助 心中萬年草 合卷
- 一 おはつ 曾根崎心中 合卷
- 一 徳兵衛 曾根崎心中 合卷
- 一 お市 心中二枚書双紙 合卷
- 一 市郎衛門 心中二枚書双紙 合卷
- 一 博多小女郎浪枕 合卷
- 一 おさん 戀八卦柱曆
- 一 茂兵衛 戀八卦柱曆

●近松時代物傑作淨瑠璃既刊書目

- 一 一世 繼會我 一 最明寺殿百人上臈
- 一 一出 世景清 一 雪女五枚羽子板
- 一 一天 智天皇 一 傾城反魂香
- 一 一十 二段 一 吉野都女楠
- 一 一百 日會我 一 一姫山姥
- 一 源氏鳥帽子折 一 一天神記
- 一 一蟬 九 一 國性爺合戰
- 一 一日本 振袖始
- 一 一會 我會稽山
- 一 一傾城 酒呑童子
- 一 一本朝 三國誌
- 一 一雙生 隅田川
- 一 一信州川 中島合戰
- 一 一關八州 繫馬

●諸名家傑作戲曲小説類

太平記 綱目 大塔宮曦鎧

全一冊 竹田出雲椽 松田和吉 合作

近松門左衛門添削 定價金八錢 郵税金二錢

心中二腹帯
末廣十二段

合卷 紀海音作

定價金八錢
郵税金二錢

「大坂東雲新聞」(上略)此作は全篇と七段に分ち大塔宮皇室の衰頹と愛ひ誓然身と挺して帝と輔佐し本波羅の奸悪と斬らんと闘ひ遂に逆入親王と誅するに至るまで字々悲愴宮が御涙の珠と聯ねし素より皮想作者の企て及ぶ所にあらず
「國民の友」大塔宮職録 近松門左衛門の著作と翻刻するも以て有名なる神田叢書閣は竹田出雲の作と翻刻せり吾人は今世の文學者が此等の書と涉獵せんことと切望す
「改進新聞」大塔宮職録 神田宮本町の武藏屋は近松翁の院本に限らず出雲の半二、海音、一鳳等の著作に係る院本とも出版する由にて今回は竹田出雲の初作にて近松翁の添削と經たる大塔宮職録と發賣せり有名なる切子燈籠の齋藤太郎左衛門なれば面白しと云ふも既に贅なり
「東京新報」九本翻刻の本家武藏屋は近松門左衛門の著作と大方は摺り終り是れより他の名人稿手の作と發刊するよしにて今度は紀海音作心中二つ腹帯及び末廣十二段の二種と合本として摺り出したり相も變らず製本美麗

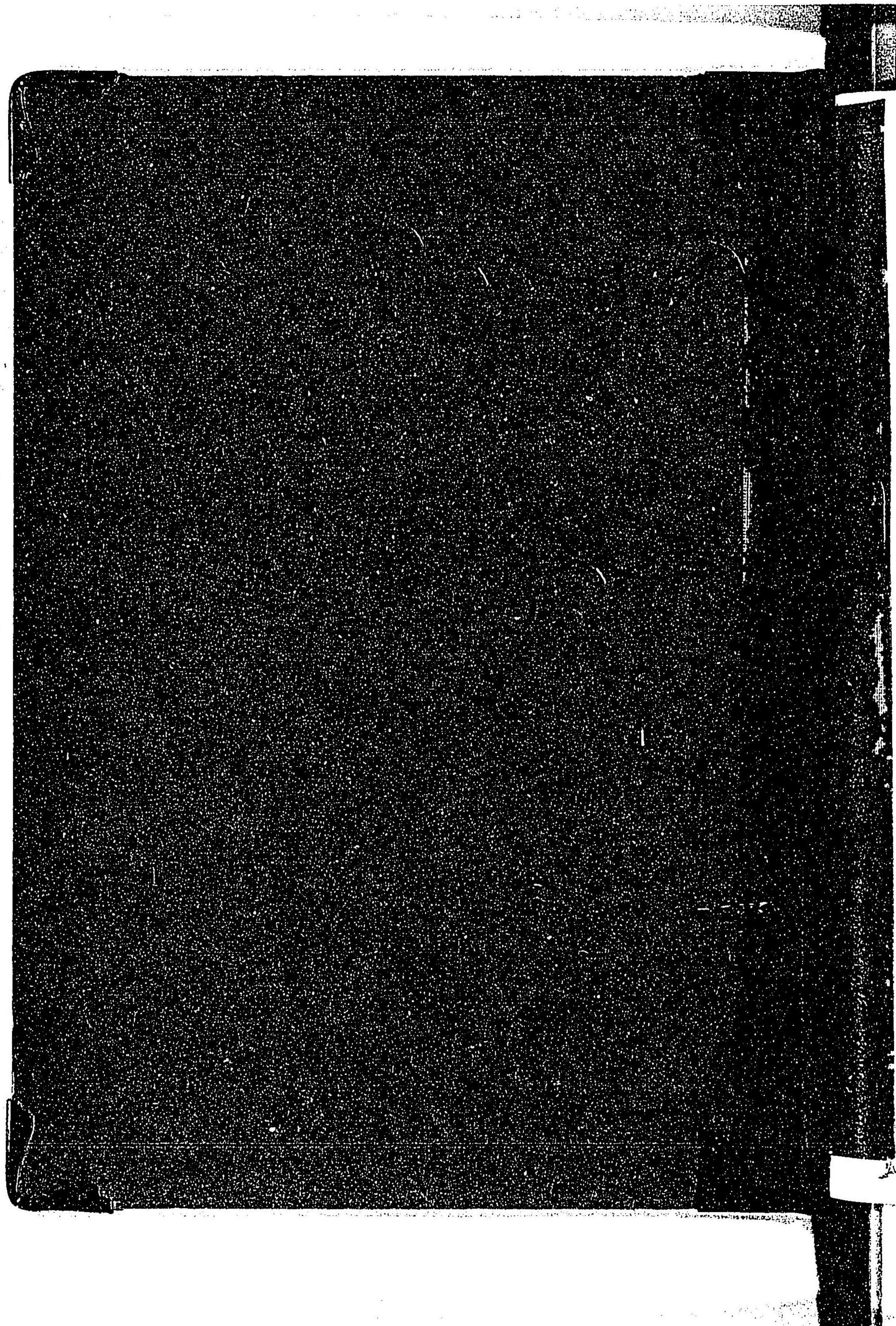
新篇大和文範

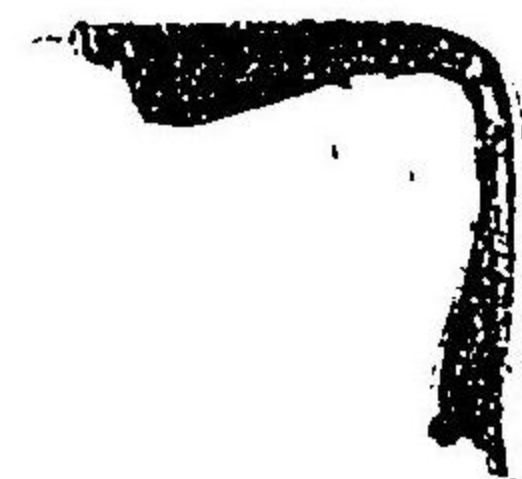
第一冊

定價金二十五錢

郵税金六錢

目録 ● 文耕堂三好松洛合作御所櫻堀川夜討 ● 近松半二作新版歌祭文 ● 紀海音作鎌倉三代記 ● 竹田出雲作男達五雁金 ● 錦文流作仁徳天皇萬年車 ● 古淨瑠璃金平法問評 ● 改進新聞評 舊篇大和文範に比して撰擇の眼孔同日の論にあらず大才と抱懐して竊に大英界に萬世と弄したる職作文壇の諸英雄是より浮ばん本編所載(中略)六部となす就中三代記の如きは海音中の出作なるかな發行所は云々





912.4

Ti238s6

信州川中島合戦

国立国会図書館

088257-000-5

912.4-Ti238s6

信州川中島合戦

近松 門左衛門/著

M25

DBI-0087



